
輪廻の血

赤面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻の血

【Nコード】

N9819C

【作者名】

赤面

【あらすじ】

異血者と呼ばれる異能の能力を持つ人々。異血者である転校生、神道朝美は人の嘘が黒い影として見える能力をもっていた。転校初日に教室で見つけた主人公の男の子、山城厚樹は真っ黒だった・・・普通という嘘で塗り固められた厚樹は人と異血者の壁にぶち当たりながら世界の真実に迫る。人と異能者の差別、異血者の組織間抗争、悲惨な過去を持つ異能者たち、異能のバトルと神話的な世界背景を組み合わせたライトノベル小説です。

プロローグ

（プロローグ）

昔々のとある世界。

ここはまだ海しかなく、陸も空もない。

ただ水に満たされるだけの世界。

そんな海界に、ある日一人の神が現ました。

神は海しかない世界を寂しく思い、この世界に命を作ろうと考えました。

まず始めに神は、一粒の種を海に浮かべました。

種は瞬く間に成長し、見上げてても天辺が見えないくらいの、大樹に育ちました。

大樹は水を吸収し、空気に変えて吐き出し始めました。

みるみるうちに、世界に空気が満たされてゆきました。

こうして海しかなかった世界には、ミグドレムの浮かぶ水面を境に、海と空に分かれました。

やがて大樹はたくさん葉を茂らせ、二つの実をみのらせました。

落ち葉は腐り土となって、大樹の根元に神の島を築きました。

神は島に腰をすえ、次に大樹の実を使って、二人の神を新に作りました。

神は一人には翼を与え空に住むように、一人にはヒレを与え海に住むようにいいました。

そしてそれぞれがすみやすいようにと、空には大樹の葉を使った浮島を作り天界とし、

海にはミグドレムの根を使った海中の陸地を作り水界としました。

更に神は空の神には太陽を与え、海の神には月を与えました

そしてお互いに交換しながら、仲良く使うように言いました。

そして二人は神の言うとおり半日おきに太陽と月を交換して使っ

ていました。

月日は流れ、世界は多くの神が住まうにぎやかな世界になりました。

すると神は子らをあつめて自らの世界にいた神々の話を聞かせました。

子らはその話を参考に色々なもの創り、世界はさまざまな神話が混ざり合うものへと変わりました。

しかしここでとうとう神の寿命が訪れ、神は深い眠りに付きましました。

そして神の眠りはそのまま世界の破滅へとつながっていきました。ある日水界の王は月と太陽を独り占めして天界は深い闇に包まれました。

怒った天界の王は一族を引き連れ水界に講義しました。

そしてそれが戦いの始まりでした。

天界と水界の戦いは熾烈を極めました。

天界の浮島は落とされ神の島を囲うように海面に浮かび、大樹は焼き払われ神の島の真ん中に大きな穴を作りました。

そして神々は最後の一人になるまで戦い、最後には天界の王と水界の王が相打ちとなって神々はついに滅んでしまいました。

そしてその神々の亡骸から人々が生まれ、

世界は神の時代が終わり、人の時代が始まりました。

プロローグ（後書き）

まずは物語の、舞台背景の大元となる話をプロローグとさせていた
だきました。

次回からはいよいよ本編に入ります。

少しずつ更新して行きます。

どうぞ最後までおつきあいいただけますことを。

序章 第一章前編

〔序章〕

とある年の夏、伊邪那緯国毘沙門園。

（ズズ・・・パラパラ・・・）

一軒屋の広いリビング、辺りの壁には無数の亀裂が入り所々が崩れていた。

床の中央には大きなクレーターができており、その周りも穴に引きずられるようにして崩れている。

その中央を脅えるようにして見つめ、その場にへたり込んだ女性が一人、うわ言の様に呟いた。

「どうして・・・あなたが普通の子だったらよかつたのに・・・普通の子だったら・・・」

見つめるその先には、何が起こったか分からないといった様子で、不安げに辺りを見回す子供が座り込んでいた。

〔一章：平穩の影〕

立明738年、伊邪那緯国毘沙門園

（おはよー、今日放課後商店街でもいく？今日あのセンサーの授業かあ）

6月27日、今日は金曜日、毘沙門北高校の朝はいつもの如く放課後の計画や日常の会話でにぎわっている。

伊邪那伊国は南東側が途切れた輪のような形をした島国で、その周りを他の国が連なってきた大きな輪で囲まれているため、時に

内輪の国とも呼ばれる。伊邪那緯国はさらに8つの園できており、毘沙門園は輪の穴に位置する伊邪湾の一部を含むほぼ真ん中に位置する園である。

そしてその南北にある高校の北（といっても正確には湾の南東の切れ目を境とした東北）側の高校がこの毘沙門北高校である。

大きな湾を囲うようにしてできたこの園は地形的に軍事拠点としての利点が多く、南東側の湾は海軍、北西側は陸空軍と言った具合に軍備が整っており、そのためこの園が首都として機能し都会のよくな雰囲気が漂っている。

そんな都会としての影響を受けた毘沙門北高校は南側に広い校庭、北西側にまるでビルのような校舎、北東側にマンション風の学生寮という配置になっている。校舎はそれをさらに東と西に分け、西側に一般教室、東側に実験室や音楽室などの特別教室、そしてその間を渡り廊下が南北に架けられた四角形の形をしており真ん中には中庭もある。

そんな高校の普段と変わらない朝に今日は一つのイベントが。「ふう、到着つと。」

栗色のショートヘアを風で揺らしながら一人の少女が校門の前に立っていた。すらつとした体に透き通った白い肌、きりりと引き締まった表情をしながらも、顔にはほんのり幼さが残っている。毘沙門北高校の制服である薄緑の制服が白い肌とあいまって白を基調とした清楚な雰囲気を漂わせている。

「とりあえずは職員室よねえ」
そういつて少女、神道 朝美は校庭の脇を通り校舎に向かって歩き始めた。

朝美は分けあって毘沙門園に家族で引越しをしてきた、いわゆる転校生である。

そしてここ二年三組では朝のHRが行われようとしていた。

(ガラガラガラ・・・)

「おはよう諸君、ちゃんと全員いるかな？ハツハツハツ！」

そういつて妙にハツラツとした声で入ってきたのは、二年三組担任の山田 景梧けいごである。中肉中背の体に声とは対照的な曲がった猫背に白髪の混じりのぼさぼさ頭、顔は気が抜けたのほほんとした顔つきである。性格もまさに顔の通りで、おっとりと温厚で生徒達からは親しみやすいと意外に人気があり『ケイちゃん』などと呼ばれ、本人もそれを了承しているのでほとんど友達感覚の扱いを受けている。

「ケイちゃん！今日転校生来てるんだって？」

話題になってたのかさっそく生徒の一人が景梧に問いかけた。

「ああ〜もう話が回ってるのか、もう少し引っ張ろうと思ってたんだが仕方ないか・・・」

景梧は楽しみを奪われた子供のような顔でため息を小さくつくと、廊下で待機しているであろう生徒を呼んだ。

「神道入っていいぞ〜」

すると先ほどから景梧が開け放したままの入り口から、ゆったりとした足取りで朝美が黒板の前まで歩み寄り生徒たちの方にクルツと方向を変え、透き通った声で自己紹介を始めた。

「今日からこの学校に通わせていただく神道 朝美です、よろしくお願いします」

ペコツと頭をさげると細い栗色の髪がサラリと音が聞こえそうなほどに揺れる。

(綺麗な子だねえ、結構かわいい子じゃん、あとで色々聞いてみないかねえ)

教室のそこらでは朝美の評価や今後の計画などがヒソヒソと聞こえていた。

そこですかさず景梧がいつもの気の抜けた声で生徒たちに釘を刺す。

「まああれだ、転校初日だからあまり群がって困らせることのない

ようにな」

「はあ〜い」

そんな気の抜けた釘に答えるように、信憑性の薄い生徒たちの返事が教室に響いた。

そして案の定というか、担任の刺した釘はいとも簡単に抜け落ちたようだった。いや実際は刺さってすらいなかったのかもしれない。授業が始まる前のわずかな時間に容赦の無い質問攻めが朝美に降り注ぐ。

「ねえねえ何処から来たの？得意な教科とかなに？好きなものとかは？髪の毛サラサラだよねえトリートメント何使ってるの？スリーサイズは？」

何か最後に初対面の人間に向かって失礼な質問もあったが、そんなことよりもこれは朝美にとっては非常にまずい状態だった。朝美は大量の人に囲まれるのが苦手だった、ちよつとした理由から大勢の人に囲まれると気分が悪くなるのだ。

(初日は覚悟してたけどやっぱりつらい、気持ち悪い・・・)

するとそこへお決まりといってもいいセーブの声が割って入った。「はいはい、そこまで！よく見なさい、明らかに気分の悪そうな顔してるでしょ！初日なんだからゆっくりさせて上げなさい！」

はきはきとした元気のいい声に、朝美は顔を上げ声の主を見上げた。

そこには腰ほどまである長く艶のある黒髪に透き通る白い肌をした少女がいた、そしてきりつと目鼻のととのった顔立ちは少女を人一倍大人びて見せていた。

「・・・綺麗」

少女を見て麻美は思わず声を漏らした。

「ちよ、ちよつといきなりなに言うのよ！照れるじゃない！」

恥ずかしそうに頬を赤らめて、少女はひどく嬉しそうに朝美の肩をバシバシと叩いた。そして思い出したように自己紹介を始める。

「あぁつと私は、島崎しまざき 沙知さちっていうの！よろしくね！」

そう言つて沙知は朝美に握手を求めて手を差し出した。

朝美は叩かれた肩をさすりながら、おずおずとしながらもその手を握り握手をした。

「こ、こちらこそよろしく」

「ああそついえばお昼とかつてどうするつもり？お弁当無いなら食堂まで昼休みに案内するけど・・・」

つと、沙知が話す途中で授業開始のチャイムが鳴り響いた。

(コーン、コーン)

「ああ授業始まつちやつた、続きは昼休みにしましよ！その間に何か聞きたいことあつたらまとめておいて！」

そついうと沙知は慌てて自分の席に戻つていった。それにつられるように生徒の群が散らばつていく。

「ぶつ」

朝美は一息ついて窓の向こうの空を見やつた、今日はよく晴れていて青空が広がつていた。そしてその視界の端に一人の少年が映つたのと、先生が入つてきたのはほぼ同時だった。

(ガラガラガラ・・・ガタガタツドサツ)

「ど、どうした!？」

入つてきたばかりの初老の先生が目を見開き慌てて声を上げる、教室内を見渡すと見慣れない生徒が机に乗つたものを押しのけ、ぐつたりと倒れこんでいた。

先生は急いで駆け寄るとぐつたりとした生徒を軽く揺すつた。

「君！大丈夫かね？」

すると間髪いれずに凜とした声上がる。

「先生！その子今日転校してきた子で朝から顔色が悪かつたんですが、私が保健室連れて行きますようか？」

声の主は沙知だった、先生は少しあたふたしながら沙知にまかせた。

「そつかね？じゃあ沙知君お願いするよ。」

「はい。」

返事もそこそこ沙知は朝美に駆け寄ると、肩を貸して教室を出て行った。

二年三組の教室は校舎東塔の2階にある。

東塔には一階に一年、二階に二年と学年ごとに階分けされており三階建てになっている。

二年は4クラスあり2階の南から順に一組二組とならび、三組は北から2番目の位置にある。

とうの保健室は西塔の一階、南端に位置していた。

保健室に向かうまでの廊下で沙知は心配そうに朝美の顔色をうかがっていた。

「神道さん大丈夫？」

「・・・うん、ちよっとした貧血、大丈夫いつものことだから・・・」

弱々しい声で返事をしながら朝美は乾いた笑いをした。

「いつものことって、持病とかでもあるの？」

より心配そうな顔をして訊く沙知に、朝美は首を横に振って無理に明るくした声で否定した。

「違うの、子供のころから体が弱くて少し貧血を起こしやすいの」

「ごめんね、朝美はそう小さい声で付け足した。」

「あやまるようなことじゃないわ。私は授業抜け出せて楽できてるんだし」

沙知は冗談めかして明るく振舞った。半分以上は本心である。

しかし朝美にはその明るい笑顔が胸に刺さった。

先ほどの謝罪は苦勞をかけていることへの謝罪もあるが、嘘をついていることへの謝罪でもあった。

朝美には、普通の人には無い能力があった。それは人の偽りが見えるというものだった。

普通の人は、一生のうちに多少の嘘や隠し事をする。そして朝美には、それがうごめく影として見る事ができた。

それゆえに、人が密集したような場所に行くと、いつも重度の人

酔いのような状態に陥る。先ほどの沙知への発言も単に容姿への評価だけではなく、影の少なさへの評価でもあった。今の世の中で沙知ほど影の少ない人間は珍しい、そしてそれは朝美にとっては貴重な存在だった、影を見ると気分が悪くなってしまう、そのため沙知は砂漠のオアシスも同義だった。

今度は朝美が話題の切り替えもかねて問いかけた。

「あのさ・・・私の後ろの列の窓際に座ってた男の子ってどんな子？」

「神道さんの後ろの列の窓際っていうと・・・」

沙知は朝見の言葉を繰り返しながら顎に手を当て席の並びを思い浮かべる。

「ああ、山城君ね！山城やましろ 厚樹君！あじき どんな子って聞かれると答えにくいわねえ・・・あえて言うなら・・・」

言葉をまとめようと沙知は唸りながら考え込む。そして言葉がまとまったのか、がばつと顔を上げこう答えた。

「普通の子ね！」

単純明快ストレート、あまりの情報の少なさに思わず聞き返す。

「えっと・・・普通の子？」

疑うような視線を向けられて沙知は慌ててこう付け加えた。

「普通っていつてもただの普通じゃなくて、何て言うんだろ、普通の中の普通？中の中？普通の王道？」

「とにかく、すごく普通ってこと？」

「ん〜でも少しずれた普通なのよねえ、テストをやらせればほとんど50点、スポーツやらせればほとんど引き分け、まあ性格はどっちかって言うとはんわかした感じかなあ、そうやって考えるとまあ良い子の部類に入るのかな。」

そこまで言うと言と沙知は興味津々の目で朝美を見つめる。

「それで〜？どうして山城君のこと聞くわけ？もしかして一目ぼれ？」

目を輝かせながら迫ってくる沙知を両手で阻みながら、

「べ、別にたいしたことじゃないの、ただちょっと目にとまっただけ……」

それを聴いて沙知は厚樹の容姿を思い浮かべる。

山城厚樹の第一印象は『大人しそうな子』である。襟首の高さで切られたごく普通の髪型の黒髪、160半くらいの身長と太くも細くもない中肉中背の体、顔は幼さのわずかに残る童顔で、どちらかというと綺麗な顔つきをしている。性格の方も顔に合ったほのぼのとした性格でかなりのマイペースである。だが先ほども言ったように故意に普通に振舞おうとしている節があるのだが、いかんせん本人の価値観のせいか一般人の考える普通からずれている。とにかく真ん中が普通と考えているようだ。

その辺を考慮から除けば、いたって普通の子で素直に好感が持てる子である。だがそこまで印象的な子には思えないが、そこら辺は個人の価値観の違いだろうと、それ以上の思考をやめた。

そして隣を見ると朝美が気遣うような視線をこちらに送っている。どうやら結構長い時間考え込んでいたようだ、そしてふと気が付いた。

「神道さん結構元気できてきた？」

「あつ……」

つと声を漏らして朝美は恥ずかしそうに顔を伏せて続けた。

「島崎さんの近くにいとるとなんかほっとするっていうか……気分が楽になるの。」

それを聞いて沙知まで恥ずかしそうに頭をかきながら、

「ああつと、私って癒し系なのかしら……？それとこの島崎さんってどうにかならい？あんまり名字で呼ばれるのって慣れてないのよね。」

本来の理由は嘘のない沙知の性格にあるのだが、そんなことは露知らず恥ずかしさから話題を強引にずらす。

「あつごめん、じゃあ沙知さんって呼んでいいかな？」

「さんってのもなんか苦手なんだけどまあいいか、私は朝美って呼

ぶから！よろしくね。」

そういつて沙知は無を言わせぬ笑顔を朝美に向けた。

「まあ一応用心のために保健室行っておこうか。」

そういつて沙知は朝美の手を引っ張って保健室まで走っていった。

いっぽう教室では、

「神道さん大丈夫かなあ。」

「顔色真つ青だったね。」

朝美が転校早々に倒れたために授業そっちのけ朝美の話をする生徒がほとんどだった。そんな中一人普段と変わりなく初老の教師の授業を聞いている生徒がいた。

「なあ厚樹！お前よくこんな時に普通に授業受けてられるなあ。」

「ん？だつてほら自分が倒れたわけじゃないし、先生は授業やつてるんだから聞くのが普通じゃない？」

そういつて彼、山城厚樹は線の細い幼さのわずかに残った顔に人懐っこいにこやかな笑みを浮かべて授業を再び聞き始める。

「まあそうなんだけどさあ、連れて行つたのが島崎でそのうえ先の『綺麗』発言だぞ？なんだか色々起こりそうじゃないか！」

と、他の生徒とはずれた心配をしているこの少年は、厚樹と変わり者同士で仲のいい狩谷かりや隼人はやとである。紅く逆立つスポーツマンっぽい髪に、細身ではあるが鍛えられたしなやかな体、背は厚樹より頭ひとつ大きい、スカツとした爽快な笑顔がぴったりのきりつとした顔である。

女の子受けしそうな容姿ではあるが、性格があれなせいか一部のマニアックな女子に人気があるにとどめている。

そんな俗に言う変人と、普通なのだけれどどこかずれた人間とでかなり息があっている。

厚樹とは中学からの付き合いでそれなりに長い付き合いになる。

隼人はその性格のせいかあまり人となじむことが無く厚樹は数少な

話し相手でもある。

隼人がふと視線を机にやり、首を傾げる。

「そういえば厚樹、お前授業聞いている割にはノート真っ白だな。」
隼人の席は厚樹の前の席で、後ろを振り返った体制から視線を下にずらすと、そこには真っ白のノートが本来の役目をはたすことなく広げられている。

するとさも当然というように答えが返ってくる。

「ん？だってここ先日やったところだから普通写さずに聞くだけでいいんじゃない？」

「ん〜？」

宏紀が確かめるように黒板を見ると、初老の教師が必死になって書いている図や文字は確かに先日みた内容である。

不意に隼人の目が輝く、まるでなぞを解き明かした探偵の目で、厚樹にだけ聞こえるくらいの声で言い放った。

「まつ、まさか・・・先日の授業との違いを答えさせる間違い探し方式の新型授業か!？」

「今のところは先日の授業との違いは無いようだけど？」

厚樹が冷静に隼人の推理を打ち砕こうとするが、これくらいでへこたれる勘違い野郎ではない。

「いや、よく見る！あの図と文字の位置が先日とは逆になっている。いかに正確に黒板を写しているか試すに違いない！」

「あ、本当だ。気づかなかつたなあ、さすが隼人だね。」

「ふふふ・・・まあ俺にかかれればじつちゃんの思惑なんてばればれだぜ！」

そう言っつて自慢げに胸をはる隼人をそっとしておいて、厚樹は黙々と黒板を写し始めた。

その日、歴史の初老教師黒谷信三くろたにしんぞうのうっかり授業は、転校生の初日からの保健室行きにどよめく生徒と、妄想全快の勘違い野郎二人によって止められるはずもなく、結局授業を止めたのは授業終了を知らせるチャイムの音だった。

そして学校は昼休みを迎える。

その頃には体調を持ち直した朝美も教室に戻ってきていた。

「朝美！ご飯どうする？」

昼休みに入るとさっそく沙知がお昼ご飯にさそつてくれた。

2年3組は縦6列、横6列の最後列の左端右端の欠けた34人のクラスで、朝美の席は後ろから3列目の廊下側から3列目の位置にある。ほぼど真ん中で、多少不満はあるものの左隣には沙知いるので少し安心でもある。

沙知は弁当を持参している様子で、その手には黄色い布で覆われた四角い箱が握られている。

朝美は引越し云々で朝から忙しく、とても弁当を用意する暇はなかった。

「今日はお弁当持ってきてないから食堂教えてもらえるかな？」

苦笑いを浮かべ遠慮がちに頼む朝美に、沙知は親指をぐつと立てて気持ちのいい笑顔を整った顔に浮かべる。

「了解！私はお弁当だけど一緒に食堂でたべるわ。」

そんな会話をして二人が席を立とうとした瞬間、教室の扉が勢いよく開かれる。

（ガラガラッ、ピシャッ！）

扉が限界まで開ききり、そこからクククツとかすかな笑いを浮かべながら男が一人教室に踏み込む。

背は高く180に届くか届かないかくらいで、海の底を思わせる深い青色の髪は首元にとどくくらいで、整った顔は大人びて一瞬教師かとも思うがその体は薄緑の学ランに包まれており、意思の強そうな目には銀のフレームが上側だけに付いた丸い細めの眼鏡をかけている。

口元に深い笑みを刻んだまま入ってきた男は窓際の方に視線を向ける。

「やあ我が友とそのおまけよ！昼飯に誘いに来てやったぞ！」

開口一番のこの台詞にも回りは慣れた様子である。

男はそのままズカズカと目的の机まで歩を進める。着いた先は厚樹の机で、机の主は長身の男を見上げて笑みを浮かべる。

「やあ漣いらっしやい。」

こうして厚樹の幼馴染みでもある水薙みなぎ 漣れいは、じつに堂々と現れた。

「誰がおまけだ！自分の教室で一人寂しく弁当つついてる！」

おまけ呼ばわりされた隼人は文句に加えてお返しとばかり罵声を浴びせる。

「ふんっ、ただでさえ私を差し置いて厚樹と同じクラスにいなながら、その上おまけの分際で私の許可なく口を開くとは、まったく持って救いようがないな、狩谷！」

「ふっ、嫉妬か？水薙家の人間ともあるう者が見苦しいことこの上ないな。」

言い合う二人の男の間にはいつしか火花がはじけ、辺りに殺気が飛び交い始める。お互いの目には今にも殴り合いを始めそうなほどの鋭さが宿っている。それは周りの生徒が思わず固唾を呑むほどの様子だった。

だが、そんな誰もが動くのも遠慮する空気の中、一人さも何でもないように二人の間に割ってはいる。

「まあまあ二人ともそれくらいにしないと、ご飯食べる時間なくなっちゃうよ？」

厚樹のその声に、二人の今にも人を殺さんばかりの目が常のものに戻る。

「まったくだ、私としたことが貴重な時間を無駄にするところであった。」

「そーだな、さっさと飯にするか。」

二人がそう緊張を解くと、周りの生徒たちも自分たちが、固まっていたことに気が付いて慌てて動き出す。

そして例外なく沙知もすばやく動く。

「やばいわね、変なのが集結しちゃったわ。さあ逃げるわよ、朝美！」

そういうと左手に弁当、右手に朝美の手首を掴むとあわてて教室を脱出しようとする。

朝美はついつられて3人のやり取りを目に入れ、再び厚樹を見て気分が悪くなっていた。さすがに最初のように倒れるにはいたらなかったが、やはり慣れるまでにはまだまだかかりそうだ。そう思っていたところを、不意に手を引つ張られ大きく体制を崩す。

しかしそれはすぐに呼び止められることとなった。

それも沙知にとつてかなり不本意な形で。

「まあ待ちたまえ沙知君、このおまけが変なものであることは認めるが、そう慌てて逃げるほどのものでもなかるう。」

「はあ、やつぱり絡まれた。」

沙知は予想していたこととはいえ、今の事態に隠すことなく盛大にため息をつく。

「おやおや、同じ生徒会仲間としてその反応は少々傷つくねえ。今にも涙がでそうだよ。」

そう、沙知と澪は同じ生徒会仲間でそのうえ両方ともが行動派ということでよく一緒に仕事をさせられている。さらにというと沙知の三組と澪の四組は何かの活動のたびに組まされることがおおく、かなり親密にさせられている。

実際には澪が裏から手を回し、厚樹のクラスと一緒に活動が出来るようにしていたのだが、あくまで一般の生徒である沙知には知るよしもない。

「そこにいるのは今日転向してきた生徒で、これから食堂に行くのであるう？我々もこれから食堂に行くのだが、一緒に食事を取らないかね？我々も二人で食べるより大勢のほうが楽しいからねえ。」

「おい澪！お前、俺のこと完全に人数から抜いてるだろ！」

「おっとこれは失礼、ついついおまけのことを忘れていたよ。」

そんな澗の顔にはしつかりと喜色の色が浮かんでいる。

しかしそれを聞いていた朝美は気がきではなかった。一緒に食事をするということは厚樹をいやでも視界に入ってしまう。気分が悪くなるのは回避したいが、どの道同じクラスなので早めに慣れておいたほうがいいというのもある。それに厚樹の嘘か隠し事を解決すれば少しは影が薄くなるということもあるので、出来ればいろいろと情報を仕入れたかった。

が、沙知の方をみると見るから嫌そうな顔を澗に向けている。

どうなるのかとおろおろしていると、不意に沙知がため息をつきながらこちらに顔を向けた。

「朝美どうする？っていうかあいつが誘ってきた時点ではぼアウトに近いけど、あんな変体どもと一緒にでもいい？」

「変体など一人しかいないはずだが、どもというのは少々気になるね。」

そんな変体を無視して沙知は朝美の答えを待った。

朝美はもともと沙知さえよければ望むところだったので、首を縦に小さく振る。

「私がかまわないよ、食事は人数が多いほうがいいしね。」

人数どうのというのは本当の気持ちだった。食事は大勢のほうがいい、集まる人にもよるだろうが少なくとも暗い食事になることはなさそうだ。

「ん、話はまとまったみたいだね。それじゃ行くこうか。」

そういつて厚樹がにこやかな笑みを浮かべて廊下に出ると、あとの面々もそれに続いた。

食堂は特別教室の集まる東塔の一階北端に北側に飛び出す形になっている。外側に飛び出しているだけあって食堂は普通の教室よりもかなり広く、教室2個分くらいの広さはある。

厚樹達一行は食堂の南側の奥にある6人がけの席を陣取ると、さ

つそく食事の準備をはじめる。

澗と沙知は持参した弁当を広げ、厚樹・隼人・朝美の3人は券売機で昼食を選ぶ。

しばらくして3人がそれぞれの昼食を抱えて席に戻ってきた。厚樹はカレーライス、隼人は牛丼、朝美は親子丼で3人とも汁物として味噌汁をつけている。

「カ、カレーに味噌汁って・・・」

思わず突っ込みを入れたのは思ったことは口にせずにはいられない沙知だった。

「ん？ご飯には味噌汁じゃない？」

厚樹はさも当たり前前というように言うが、ご飯はご飯でもカレーでは、っと思うのは自分だけなのだろうかと思ひ他の面々に視線をやるが、朝美が苦笑いをするだけで残りの変体2匹はまるで気にしていない様子だった。まあこのメンバーでは無理も無いことかとあきらめることにした。

すると澗が、そういえばと話を切り出した。

「まだ自己紹介をしていなかったな。私は四組の生徒会役員をやっている水籬澗だ。沙知君とは生徒会仲間だね、それなりの付き合いをさせてもらっている。もっともメインは我が最愛の友、山城厚樹なのだな」

と最後に付け足すと澗はこれ以上ないほどの笑みを浮かべて厚樹に視線を送る。

カレーを口にせつせと運んでいた厚樹は、澗の視線に気付きにつこりと微笑み返す。

「そう言えば教室でも仲がよさそうでしたけど、付き合い長いんですか？」

そう口にしつつ、朝美は先ほどの教室でのやり取りを頭に浮かべていた。

一人を無視して厚樹とのみ会話しようとする姿はそれを如実に語っていた。ひょっとしたら厚樹の影の原因も、彼ならば分かるので

はないかと密かな期待をする。

「ふむ、やはり分かってしまうかね？これでも普通に接しているつもりなのだが、どうも私の溢れる愛がにじみ出してしまうようですね」
クククク・・・と細かな笑い声を上げて、銀のフレームの眼鏡をクイと上げる。

「そりゃ人を無視して厚樹とばかり話してりゃだれだってそう思うっての！」

「ちなみに私は厚樹とは小学校からの付き合いになる。一時期は厚樹を家に居候させていた時期もあってね、新密度はかなり高いものと思ってもらっていいだろう！」

隼人の非難の声を軽く無視して、澪は胸を張って自慢げに答える。
「ふん！ちなみに俺は狩谷隼人！厚樹とは中学からの知り合いだが、ずっと同じクラスだね、どっかの誰かさんよりは新密度が高いんじゃないかな！」

負けじと隼人が胸をはって答え、鋭い視線を澪に飛ばす。逆に飛ばされたほうは、さげすむような視線を送り返している。

今にも武力行使に移りそうな二人に、割って入るように沙知が鋭く突っ込む。

「誰が山城くんとの新密度を話せて言ったのよ！自分の紹介をしなさい自分の！」

そんな静止の声にひるむことなく睨み合う二人に沙知はため息をつくと、しぶしぶ追加情報を付け加える。

「ちなみにそっちの眼鏡の変体がこの街の裏の立役者でもある水薙組の跡取り息子、そっちの逆毛の変人がこの街の治安を守る狩谷警視總監の一人息子、まったくこんなのが街の裏と表の代表達の息子かと思うと・・・この街大丈夫なのか、かなり心配ね・・・」

最後に盛大なため息をついて沙知は説明を終えた。

「やれやれ、あまりその話を一般市民にしないでもらえないかね、色々と事がやりにくくなるのでね」

口で言うほど困っていない澪の様子からすると、ばれてもそう問

題ではないようである。

それよりも、その説明を聞いて朝美は妙に納得した気分になった。納得したのは街が大丈夫かの事ではなく、漣と隼人の関係である。家どうしが対立関係にあるのではこの二人がいがみ合うのも当然で、むしろ一緒に行動しているのが不思議なくらいである。その仲介の役割をしているのがおそらくこの山城厚樹という人間なのだろう。

そう思うとますます疑問は膨らむ、影のことといい二人との異常なまでの新密度といい、なぞは深まるばかりである。そこで先ほど感じた疑問を多少聞きにくいことでもあったが口にしてみることにした。

「あの、そういえばさっき水薙君が山城君を居候させたことをもって言っただけど、どういうこと？」

居候ということは家がない、もしくは家に居られないなどの状態にあったということ、何かあったのは間違いないだろう。聞きにくいことではあるが厚樹の影に関係がありそうなので、思い切って質問したのだが、どうやら地雷を踏んだらしい。

場の空気が一気に沈んで、みながちらりと厚樹に視線を送る。

視線を受けた厚樹はそれに気付いたらしくカレーを口に運ぶ手を止めて、顔を上げなんでもないことのように告げた。

「僕の両親は両方ともどっかに逃げちゃったらしいんだ」

あまりに明るく言うものだから一瞬何をいっているのか分からなかった。逃げた、とはどういうことか、だが冷静に考えれば結論は一つ。

つまり親が両方とも蒸発して、居なくなってしまったということだ。

朝美は悪いことを聞いたとは思ったが、可哀想だとは思わなかった。

何を隠そう朝美にも両親はいない、朝美は施設で育った子だった。話によると朝美の両親は、2歳になるかならないかくらいの朝美を施設に預け、そのまま戻ってこなかったということだ。

物心ついたころには親は最初からいなかったもので、いなのが当たり前だと思っていた。他の子に親が居るのを見ていいなあとは思ったこともあるが、綺麗な服いいなあくらいの感覚だった。

厚樹の両親がいつから居なくなっただのかは知らないが、居ないものはどうしようもないし、一人で生きていく事だつて出来るわけで、それを他人にとやかく言われる筋合いはない。そんな気持ちから朝美はただ、そっか、とだけ答えた。

しかし驚いたのはその後だった。

「神道さんでしょ？べつに気にすることないよ」

え、思わず手に持っていた箸を落としそうになって慌てて掴みなおす。

回りをみるとみながぎよつとした視線を向けていた。どうやら驚いたのは自分だけではないようだった。

もちろん朝美はこの街にきてからまだ誰にもその事を話していないし、話すつもりもなかった。

なんで、そう思ったのが顔に出たらしく厚樹は視線を合わせたままで、

「なんか同じ雰囲気でしたからもしやと思ってね、違ってたらごめんね」

そついう厚樹の顔は、言葉とは裏腹に確信に近いものを感じている表情だった。

一瞬空気が重くなるがそこはさすがこのメンバーである。沙知がおもむろに口をひらく。

「まあ私にはそういうのわかんないけど、似たようなのがいるんだから気にすることないと思うわ」

「なんなら君もうちに居候してくれてかまわないぞ、我が家はおおらかな人間がおおいからな！」

澁も場を和ませるつもりなのか本気なのは分からないが、そんなことをいった。

「誰があんな変人の巣窟に好き好んでいくかよ！」

「別に貴様に言ったのではないが、まあ庭に小屋と首輪と鎖、今なら水入れ皿も用意してやるわ、どうかね？」

「どうやら一族全員豚箱に送られたらしいな」

そんな隼人と澁の言い争いはあわや殴りあいのところまで発展したが、厚樹が間に入ることでの危険性は取り除かれた。

「埃が舞うでしょ？」

その一言で殴り合いが回避されるのだからさすがである。

そんな楽しくも騒がしい食事はあっというまに時間制限を向かえ、午後からの授業が始まった。

「僕は自己紹介しなくてよかったのかな？」

「まあいまさらだろうな」

そんなどこか納得いかない様子の厚樹と隼人の会話は午後の授業が始まってすぐのことだった。

序章〈第一章前編（後書き）

いよいよ本編スタートです。

前編ということで、まずは主人公の周りの環境を紹介しながら、話を進めて行きたいと思います。

では次回第一章後編でまたお会いできる事を。

第一章後編

その少女は東塔の屋上にいた。

辺りには授業中であるため当然のように他に人はいない。広い屋上には貯水タンクとベンチが二つ、それにぐるっと屋上を囲うフェンスがあるだけで何も無い、さらに剥き出しのコンクリートは何もない屋上をよりいっそう寂しく見せている。

外見は16歳くらいだろうか、小柄な身長と幼い顔に浮かべた微笑は中学生か高校生かの判断を非常に難しくしている。極めつけは服装で、黒くゆったりとしたワンピースは当たり前だが制服ではない。足の膝辺りにまで伸びた長い髪は鴉の羽のような漆黒で、風になびくそれを右手で抑えながら校舎に囲まれた中庭の向こう、西塔をフェンスに寄りかかる形で眺めている。

「今度はちゃんと捕まえられるかなあ〜」

外見どおりの幼い声は、虫取りで遊ぶ子供のように楽しげである。クスクス、そんな笑いさえ聞こえてきそうな笑顔で、少女は首から提げたペンダントを綺麗な細い指で遊ぶ。

煌めく銀の鎖でつながれているのは、翼を広げた黒い鳥のペンダントだった。

(キーンコーンカーンコーン)

チャイムが響き本日最後の授業が終わりを迎える。

「それじゃあ今日はここまでね、問題集の56Pから58Pまでは予習として次の授業までにやっといてねえ〜」

そう言い残して科学担当の女教師安西恵美子あんざい えみこが、白衣のポケットに教科書と問題集を丸めてねじ込み気だるげに教室を出て行く、それとほぼ入れ違いに担任である景悟が入ってきた。

「ぱぱっとホームルーム始めるぞ〜」

そう言っつてちょこちょこつと連絡をするとホームルームはあつという間に終わった。

もともと長話が好きなたちではなく、ささつと言うことだけ言っつて終わりにしている。それもまた景梧の人気の一つでもある。

「えつと今日の掃除は、三井と森だな、頼んだぞ」

それじゃあなつと最後に言い残して景梧は足早に教室を出て行つた。

教室に残っていると掃除当番がブーブーと文句を言い出すので聞く前に逃走を図るのが一番だった。

「さすがケイちゃん、逃げ足はやいなあ」

そんなことを言いながら掃除当番二人はしぶしぶ掃除を始め、他の生徒は下校または部活に向けて鞆に教科書などを詰め始めた。

そんな中、隼人は鞆に入れるものなど何も無いと言わんばかりに、机の横に掛けてある鞆を肩に担ぐ。

「んじゃ、お先に〜！」

そう厚樹に言い残して一目散に教室を出て行つた。

このまま帰つて遊び呆けるような勢いだが実際には隼人は剣道部に所属しており、このように毎日放課後が来るとそのために学校に来てますの勢いで部活に向かって一目散である。

すると今度は逆に溲が教室に入ってきた。

「厚樹、すまない生徒会がはいつてしまった。悪いが今日は一緒に帰れそうもない。まったく私と厚樹の貴重な時間を潰すとは、やはり生徒会なんぞ早々に潰してしまふべきか、だがそうすると人民操作がしにくくなるか……」

などと物騒なことを呟きながら沙知を連れて教室を出ていった。

そんな沙知を見送り、朝美が帰ろうと席を立つと不意に横合いから呼び止められた。

「神道さん」

振り向くとそこにいたのは厚樹だった。

「神道さんって寮生でしょ？まだ来たばかりで色々買出しに行か

ないといけないんじゃない？」

「え？あ、そうだけど」

一瞬なぜ寮と分かったか疑問に思ったが、よくよく考えれば先ほど親がいない話をしたばかりですこし考えれば寮生だと察することは容易だと思い至り、素直に肯定した。

「この辺不慣れだろうから案内するよ、僕も丁度買出しに行くところだしね」

そう提案されどうしようかと考えたが、買出しにいかねければいけないのは事実で、ひよっとしたら影のことについても何か聞けるかもしれないと期待もあつて、朝美はその申し出を受け入れることにした。

「それじゃあお願いしようかな、正直迷子覚悟でお店探すつもりだったから」

「うん、それじゃ行こうか」

話がまとまり二人は買出しに行くため教室を後にした。

買出しを終えて寮に向かう道を歩きながら、朝美は改めてこの山城厚樹という男のことを考えていた。

買出しをしながら厚樹の買うものを眺めていると、それはまさに普通だが普通でない買い物。

買うもののほとんどが中型サイズのもの、S M LでいうならすべてMである。洗剤から食料品すべてMサイズのものを買おうとする中でも電池には驚いた。

電池はたいていお店では単一から単四までが売られている。電池でよく使うのは単一と単三、だが厚樹が買ったのは大量の単二電池、おそらく間を取って単二が普通だと思っているのだろう。だがそれで大丈夫なのかと聞けば家においてある電池で動くものは全部単二電池で動くものとの話だ。

まさかここまで徹底しているとは思わなかった。

他にも違うメーカーで同じもの値段もばらばら、それならば普通は一番安いものを買うところを厚樹は大体真ん中の値段のものを買う。

どうも厚樹の普通とは『真ん中』という意味らしく『一般的』という解釈ではないらしい。

だが学校や寮などの会話をしていれば真ん中云々を除けば普通の子で、とても影で染まるような人間には見えなかった。

そんなことを考えながら歩いていると、やがて人通りの少ない道に入った。

すると前を歩いていた厚樹が急に止まった。

不振に思って朝美が厚樹の向こう側、通路の奥に視線をやるとそこには一人の男が立っていた。

6月も終わろうというこの時期に黒い長めのコートを羽織っている男は明らかに怪しい、顔はコートの襟と黒いつば広の帽子でよく見えない。

しかしその男の胸元、銀の鎖でつながれたペンダントを見て思わず目を見開いた。

そこには銀の十字架がぶら下がっており、その中央には黒い鳥が羽を広げた形の紋様が刻まれていた。

そのペンダントには見覚えがあった。

ここに引越してくる原因ともなったもの。

こんな時期に転校生、その想像正しく今回の転校は分けありだった。前に住んでいた街で同じペンダントをした男に追われていたのである。

その男は朝美を追う前に礼儀正しく自己紹介してきた。最初は話しを持ちかけてくるだけだった、しかしそれを朝美が断ると男は朝美を追い回し始めたのだった。

その時は警察に駆け込むことでどうにか間逃れたが、その後も男の追跡は止まず引越しに踏み切ったのだった。

引越しをしている間、男が再び現れることはなく安心していただけ

だが・・・

依然とは違う男のようだが、そのペンダントを見れば一目瞭然である。

そして男はおもむろに自己紹介を始めた。

男の声が過去の記憶と重なる。

「どうも、思考の交差フギンクロスの者ですが」

そう言って男は帽子を取って頭を下げた。

そしてその後が続く言葉もやはり同じものだった。

「神道朝美さん、われわれの同志となっていただけませんか？」

だが今回は以前とはすこし違った。

男が懐に手を入れ、出したときにはその手に黒光りする拳銃を握っていた。

「すいませんがあなたには用はありませんので」

帽子を取ることであらわになつた顔には謝罪の色は微塵もなく、むしろつりあがつた口の端は楽しんでいるようである。

そして抜き去った拳銃を迷いなく厚樹に向ける。

だが厚樹の行動は早かった。普通なら恐怖で立ちすくんでしまいうそのなこの状況の中すぐさま走り出した。

「こつち！」

そう言う厚樹の表情は常ののほほんとしたものではなく、かすかに緊張感をふくませたものだった。

そのまま朝美の手を掴むと荷物を投げ捨てすぐさまその場から逃走した。

「おやおや困りますねえ、勝手に大切なお客様を連れて行かれては」
そういつて男は厚樹たちの後を追いつ始める。

今までの通つてきた道を一直線に引き返す。

厚樹に手を引かれ必死に走る朝美はちらと後ろを見る。

男は走りながら銃を構えている。撃たれるつと思つが逃げようにも通路は狭く横には回避できない。

このままこの直線の通路を逃げれば間違いなく撃たれるだろう。

そう思った矢先に横道を見つけ、今度は朝美が厚樹の手を引つ張った。

「そっちは！」

と厚樹が叫んだがもう後の祭り、横道の進んだ先は行き止まりになつていた。

「そんな・・・」

思わず絶望感と共に声を漏らす朝美だがコツツツという音を聞いてはつとする。

後ろを振り向けば男が歩み寄り銃を構えていた。

男は歩きながらその顔によりいつそう濃い笑みを刻むと、何の予備動作もなくおもむろに引き金を引いた。

（ガァン！）

銃声と共に銃口から鋼の弾丸が打ち出される。

「え？」

朝美が声を漏らしたときには厚樹の横すれすれを通り過ぎ、

（チユイン）

通路の壁に当たって摩擦音を残す。

「おやおや、外してしまいましたか、ではもう一発」

男が再度発砲しようとするが、それは後方からの声にさえぎられた。

「おやおや、うちの庭で粗相をしているのはどなたかね？」

「！？」

いつの間にか背後を取られていたことに気が付いた男が、ぎよつとして後ろを振り返るとそこには長身の男が銀のフレームの眼鏡を光らせていた。

「ああ、溲きてくれたんだ」

厚樹が安心しきつた顔で話しかけたのは紛れもなく水糞溲その人だった。

しかし朝美は眼鏡を光らせてたたずむ溲が一瞬別人ではないかと思つてしまった。

銀のフレームの奥にのぞく瞳が放つ眼光は隼人といがみ合つていた時の比ではない。

氷のように冷たい視線はいつものと変わらない口調から想像できないくらいに温度が感じられない。

「まったく何やら勝手なことをしているやからがいると聞いて来てみれば、まさか我が友に手を出しているようとわな……万死に値する！」

口にしたとたん一気に澪が放つ威圧感はその量を増した。

「くっ！」

澪のすさまじい威圧感に気おされながらも男はすぐさま銃口を澪に向ける。だが銃口向けられた澪は慌てる様子もなく、それどころかその冷酷な顔に冷笑を浮かべながらゆったりと歩み寄ってきた。

男は迫りくる威圧感に震える手を、暴言を吐き捨てることで押さえ込む。

「くたばれ！」

そうして、一気に引き金を引いた。

(ガン！)

再び銃声がとどろく、が、今回は壁に当たった音すら聞こえない。男はどういうことかと慌てて目を凝らす。

そしてあることに気が付いて目を見開いた。

銃弾は澪の目の前、30cmほど離れたところに浮いていた。

いや、よく見ると銃弾が浮いているのではなく、宙に浮かんだ水球に取り込まれるようにして浮かんでいた。

男は浮かんだ水球をみて思わず半歩下り、表情を歪める。

「き、貴様、異血者か！」

「何をいまさら驚く必要があるのかね？そもそも貴様等フギンクロスも異血者の集まりであろう？」

わめく男と違って澪の声はひどく落ちついていて、それがより男の恐怖を煽る。

澪は少しずつ男との距離を詰めていく、その足取りは散歩でもし

ているかのように軽い。

「ひい！」

男は小さな悲鳴を上げると、尻餅をついてそのまま後ろにあとずさる。

すると漕が鋭い視線を飛ばしながら冷徹に言い放つ。

「それ以上後ろに下がるな！私の友にその汚れた身を近づけることは許さん！」

「ひいひい」

男は視線に押されるように更に後ろに下がろうとするが、それ以上下がることはできなかった。背後には水の膜のようなものが張られそれ以上の後退をゆるさない。

こんなはずじゃなかった、男は心の中で繰り返し、これまでのことを思い出す。

始まりは上からの呼び出しだった。呼び出しに応じてみればそれは君主自らの頼みという名誉有る仕事だった。その時は自分にもチャンスが巡ってきたと大いに喜んだ、そのうえ仕事の内容は殺傷能力の無い異血者の勧誘という安全なもだったはずで、まさかこんな事態になるなど予想だにしなかった。

これは夢だ、何かの間違いに違いない。

そんな思いに浸っていた男を、威圧感を含ませた声が現実に無理矢理引き戻す。

「どうやら貴様は一般構成員のただの人間のようなだな」

どこか拍子抜けしたように肩を落とすと、漕は大股に男に歩み寄りその胸倉を掴み上げ、そのままゴミでもするように背後に投げ捨てる。

「あとの始末は任せる、不愉快だ連れて行け！」

「はっ！」

背後の通路にはいつからいたのか、ダークブルーのスーツを着込んだサングラスのスキンヘッド男立っており、短く返事をして投げ捨てられた男の襟首を掴むと悲鳴を残して、そのままずると通

りの闇に消えていった。

すると溇の表情がいつももの物に変わり腕を組んでふうと一息つく。「どうやら無事だったよう……」

(パチパチパチパチ)

溇の言葉は最後まで言い終わることなく不意に頭上からわいた拍手にさえぎられた。

3人が同時に音のする方を慌てて振り向く。

「フフフ、まさか『封水の操者』が出てくるとわねえ、これじゃあ一般構成員じゃどうにもならないわ」

視線の先には黒いワンピースを着込み長い鴉の羽を思わせる漆黒の髪の少女。

少女の楽しそうな声を聞いて溇は表情をしかめる。

「ほう、私の二つ名を知っているとは、ただの一般人ではなさそうだな」

そう言つて溇はさらに警戒心を強くする。と、そこで目を大きく見開き異常なほどがくがくと震えている朝美に気が付いた。

どうした？と、疑問を声にだそうとした瞬間、朝美が口元に手を当て後ろを向き地面にふせると、うえつと嘔吐し始め、何かと身がこわばる。

朝美はあまりの不快感に立ち眩みを通り超えて激しい嘔吐感に見舞われ、そのままそれを実行にうつすことを余儀なくされた。

原因は一つ、少女の影である。

それは厚樹の比ではなかった。恐ろしく濃い影は禍々しく彼女の周囲をねっとりとまるで粘性の液体のように取り巻いていた。何をやったらあんな影が出来るのか、今も続く嘔吐感の中で朝美はそればかりを考えていた。いやそれしか考えられなかった。

すると少女がまたもや楽しげに言葉をつむぐ。

「アハハ、さすが清眼の持ち主だねえ、私の内面が見られちゃったかなあ？でもあんまり他の人には言わないでねえ？」

クスクス、よほどおかしいのか少女はお腹を抱えるようにして笑

いを漏らす。

そんな少女を見て澪は更に注意深く視線を飛ばす。

そして『それ』が見えた

少女の胸の前で揺れる翼を広げた黒い鳥のペンダント、澪の目が驚愕に見開かれ知らず言葉を漏らしていた。

「象徴紋……」

「フフ、さすがに知ってるみたいねえ、一応自己紹介をしておくね」
そう言う少女は腰掛けていた屋根の縁に立ち上がると、胸の前に手を当てる。

「私はフギンクロスリーダー、紙縫こまじりつていうのよろしくね」

そういつて少女、紙縫はまるでお友達になりましょと言わんばかりに、にっこりと微笑んだ。

フギンクロスの旗印は北欧神話に登場するオーディンの二羽の鴉、フギン思想と記憶のムニシフギンを示す黒い鳥を、交差を意味する十字架に刻んだ俗に呼ばれる黒鳥十字の紋様で、象徴紋とはフギンクロスフギンの象徴である黒鳥のみを模ったものである。これを掲げることができるのはこの世でただ一人、フギンクロスのリーダーであるフギンのみである。

紙縫は宝捜しでも終えたような楽しげな表情を幼い顔浮かべる。

「今日のところは帰ることにするわ、もっといいものも見つけちゃったしね」

フフ、そんな短い笑い声と同時に、バサツと音がして少女の背に一对の漆黒の翼が広げられた。

それじゃねつと言いつて残して紙縫は、すっかり日が落ちた夜の空に羽音だけを残して消えていった。

じつと紙縫が消えた夜空を睨んでいた澪が視線を朝美に向けた。

「どうやら転校の理由はこれだったようだね、まったく厄介なもの目をつけられたものだ。だがまさか君も異血者だったとはね」

そう言う朝美はびくつと震え、ちらりと厚樹を見る。

厚樹は先ほどまでの緊張感を感じていたのかと思うほどに、のん

びり地面に座り込んでいた。

それを見て澪は朝美が言わんとするところを察した。

「安心したまえ、厚樹は私が異血者だということも知っている、今更異血者というだけで態度が変わったりはせんよ」

朝美はそれを聞いて少し安心した。

異血者、それはこの世界では虐げられた存在だった。

異なる血が流れる者、それを総じて異血者と呼ぶ。異血者はだいたい千人に一人という割合で存在し、突然変異や遺伝などさまざまな理由で生まれてくるが、共通して言えるのはその誰もが、特異な能力を持って生まれてくる事である。くわえて、ほとんどの異血者がその能力に適応する体になるため、普通の人よりも身体能力が高くなる。

人は自分と違うもの、自分には理解できないものを忌み嫌う。

異血者もそれたがわず、その類稀なる能力のために人々から虐げられている。そのためたいいていの異血者がその事を隠して暮らしている。

しかしそれが少しでもばれば、それは平穏な日々との決別となる。

学校ではイジメ的、近所からは嫌がらせをつけ、ひどいものになると家に火を放たれるということもある。

「水籬君も異血者だったんだね・・・それに封水の操者って？」

そう言っつて朝美は澪の顔をまじまじと見つめる。

見つめられた方の澪は軽い調子で返事を返してきた。

「なに、たんなるニックネームのようなものだよ」

それよりも澪が逆に聞き返してきた。

「どうして君はフギンクロスなんぞに追われているのかね？」

朝美はその質問には答えることが出来なかった。

もとより自分自身でさえいきなり追われる羽目になったのであつて、理由など分かるはずもなかった。むしろこっちが教えてほしいくらいである。

朝美はまず根本的な疑問から取り除くことにした。

「分からないわ・・・それよりフギンクロスっていったい何なの？」
しかし澪が質問に答える前に厚樹がそれを遮って声をあげる。

「まあ今日のところはこれくらいにしてかえらない？ 晩御飯作る時間なくなっちゃうよ」

さつきまでのことが何でもないことのように厚樹が提案し、澪もそれにうなずいた。

「ふむ、もうそんな時間か・・・寮の門が閉まってしまうのも面倒であろう？ フギンクロスについての説明は明日にしよう。」

「ああ、もうこんな時間だ！ 急がないと、僕先行くね！」
そう言うやいなや、厚樹は寮に向かって一目散に駆け出した。

後には澪と朝美だけが取り残された。

そして朝美はこれだけとは思って澪に質問を投げかけた。

「水籬君、山城君のあれってどういうこと!？」

朝美の強い口調に澪はすこし驚いた表情をみせたが、それは一瞬ですぐにいつもの表情にもどる。

「すまない、厚樹は普通依存症でね、今もいつもの食事の時間に間に合うか気が・・・」

「そうじゃないわ!」

朝美は澪の言葉を鋭い一言で遮った。

「私の能力は嘘が見えるという目に関するもので、目はいい方なのだから見えたの！ 山城君に向かって撃たれた弾は外れるような軌道じゃなかったわ!」

そう朝美には見えていた。正確に厚樹に向かって飛んでいく弾丸の起動が、だからといって見えるだけで避けられるほどの身体能力は無いのだが、危ないと思ったときにそれは起こった。

厚樹に向かって飛んだ弾丸の起動が横に曲がったのだ。そのため思わず朝見は、えつと声を漏らしたのだった。

それを聞いた澪は観念したようにため息をついた。

「ふ、正眼と呼ばれるからには目の能力だとは思っていたが、まさ

か気付いていようとはな、恐れ入ったよ」

「じゃあやつぱり・・・」

「その通り、厚樹も異血者だ。まあ本人は気付いていないがな、いや、覚えていないというべきかな」

朝美の予想を肯定しつつ漣はそう続けた。

そして本人には言うなよと言いつつ厚樹について話し始めた。

「まあ嘘が見えるという事は、厚樹の状態がどんなものなのかは分かっているのだろう。厚樹の普通依存症は予想しているとは思いますが、厚樹の両親が原因だ」

それは漣の言う通り予想していた。心の病を負っていて、そのうえ親がいないとなればまず間違はなくそれが原因だろう。

「厚樹の家はまさに普通の一般家庭だった、だがある日事件が起きた。私も親に聞いた話だから詳しくは分らんが、うちの一家はこの街一帯で代々異血者の代表のようなものをしていてね、それらしい事件が起こるとその現場で色々と面倒みているのだが、父が厚樹の家に駆けつけた時にはリビングには大きなクレーターができていて、その中央に厚樹が座りこみ、母親はそれを見て恐怖におびえ、父親の姿は何処にも無かったそうだ」

そこまで一気に言うつと漣は、ふうと肩をおろした。

朝美はそれ聞いてぞっとした。それが真実ならおそらく幼い厚樹は能力を暴走させ父親を巻きこんだのだろう。

「そして我が家は厚樹とその母親を保護した。しかし母親は厚樹を見ては普通の子だったらと罵った」

それも無理は無いだろう、実際問題自分の子が異血者と分かるやそれを捨てたり、ひどいものになれば命を奪う事もある。まして一軒屋のリビングにクレーターを作るほどの能力ならば、言い方は悪いが我が子が化け物か何かに見えなかっただろう。

「だが厚樹は能力を発動した時の記憶が無くてな、気が付けば父親の姿は無く、唯一の肉親である母親からは覚えの無いことで罵られる、おそらくひどく混乱していただろうな。そして保護してから二

日目、母親は厚樹を残して水籬家から姿を消した。厚樹はそのとき自分が普通じゃないから父親も母親もどこかへ行つてしまったと思つたのだろう。おそらくそれが普通依存症の原因だ。そこからは昼に話した通り家でしばらく居候して、その後は一人暮らしだ」

そこで話は終わりだと澪は肩を落とした。

朝美は昼の話を思い浮かべ、そして後悔した。自分と同じなどともんでもない、物心つく前から親のいない朝美に比べれば、その心の傷の深さは計り知れない。

最初からいないのと、捨てられたと思ひ知らされるのではまさに雲泥の差である。

しかしそんな朝美の心境を察したかのように澪が気軽に声をかける。

「別に変に気を使うことはないぞ、昼間に見たとおり厚樹もあまり気にしていないし、逆に気を使うとそれを敏感に感じ取るだろうからな」

「う、うん……」

朝美は色々な思いに胸を埋められながらもなんとか返事をするこゝとができた。

その後寮に戻つたのは午後8：50で、後10分遅れたら門が閉まるところだった。結局買出しに行ったもののほとんどが、投げ捨てた時に使い物にならなくなっている事実、激しい疲労感を感じてベッドに突っ伏した。

フギンクロスのことなど気がかりなことがいくつもあったが、押し寄せる疲労感に何も考えることができず、そのまま泥沼に沈むように眠りについた。

こうして朝美の長い転校初日が終了した。

第一章後編（後書き）

これでひとまず第一章は終了です。

この章ではひとまず主人公の現状をまとめました。

まだまだなぞの部分が多いですが、それはこれからの話の中でというこゝとで。

では次回第2章（おそらくまた前後編になると思いますが・・・）
でお会いできる事を。

第二章前編

第二章：血の狩人

(ピピピピ・・・)

まどろむ意識の中、やかましい電子音が鳴り響く。

いまだ睡眠を求め頭を、不快にしか聞こえない音が無理矢理覚醒させようとする。

それを意識的に無視するが、音は自己主張するかのようその音量を増していく。

たまらず音源に手を伸ばし、音を根絶しようとスイッチを押す。音が止み静寂が支配する中で、ゆっくりと朝美は体を起こした。

普段、目覚ましは保険で大抵その前に目覚めるのだが、昨日の一軒のせいか今日の目覚めは最悪の一言である。

昨日は、フギンクロスと呼ばれる怪しげな組織の人に追いかかれ、買出しはし直しになりと散々な出来事があり、部屋に戻ってそのまま寝てしまったのだろう。荷物は床に置いたまま、制服は着たままとひどい状態である。

とりあえず学校に行かなくてはと思い、荷物を部屋の端にやるとそのまま洗面所へと向かう。

部屋はそれほど広くない、そこそこの広さのキッチン兼リビングと洗面所と浴室のみという簡素な作りになっているが、学生寮としては色々そろっている方だろう。洗面所は玄関から入ってすぐ左手にあって、その奥に浴室が続いている。

洗面所に入ると歯を磨き、顔を荒い、髪を整えて最低限の身支度をやる。

そのまま今度はキッチンに向かい、冷蔵庫からお茶を取り出す。パンを口に入れてお茶でそのまま流し込む。

そうして朝食をささっと終わらせると、鞆をもって部屋を出た。

学校にいたら色々と溇から聞かなければならない、そんなことを考えながら、朝美は新たな学校生活の二日目を迎えた。

(どうする？映画でも見にいこっか。いいねえ行く行く)

(ねえねえ今朝のニューズ見た？見た見た！どっかのお屋敷が放火されたってやつでしょ？)

今日は土曜日で授業は午前の三限で終了し、その後は教室で雑談したり何処かへ行く予定を組んだりと、わいわいにぎわっていた。

(ガラガラッ)

「やあ諸君、まったかね？」

しばらくすると溇がいつもの如く教室にやってきた。

しかし、扉を開けた溇を出迎えたのは、今まさに部活に行こうと扉に向かって走り出していた隼人だった。

「うおっと！」

慌てて隼人が右足で踏ん張ってブレーキを掛ける。

何とか衝突を避けることに成功した隼人だったが、そこに右からの鋭い裏拳が迫る。

「うおい！！！」

それを非難の声と共に、身を屈めてきわどく回避するあたりは、さすが運動部所属の隼人であるが、いかんせん相手が悪かった。

「ええい、邪魔だ！」

そう吐き捨てる、溇は身を屈めた隼人に右足で踏みつけるような蹴りを放つ。

「どわあ〜！」

(ドシンッ)

悲鳴と鈍い音が教室に響き渡り、そこには無残にも床に転がる隼人の姿が。両手で蹴りは防いだものの反動は殺しきれなかったのか、仰向けに転がっている。

すぐにガバツと起き上がると、早速怒声をぶつける。

「てめえ！入室早々なんてことしやがる！」

だが怒鳴られた方はまったく悪びれる様子も無い。

それどころか、冷やかな視線を隼人に向けると、

「ふんっ、黙れ変体。そもそも突進してきたのはそっちで、私は自

己防衛をしたただけだ、文句を言われる筋合いはビター門ない！」

「何が自己防衛だ！ちゃんとぶつかる前に止まったただろうが！」

「何を言っている、貴様が私に近付いた時点で十分に正当防衛が成り立つわ！だいたい入室早々貴様のアップ顔を拝まされた私の心が、どれほど深く傷ついたか貴様には分からんのか！」

「むっ、言わせておけば調子に乗りやがってえ」

そう言って怒りに口をぐっと引き結ぶと、それをどう解釈したのか、澪が勝ち誇ったように笑顔を浮かべる。

「ほう、どうやら言い訳のネタが尽きたようだな。やはり私の方が正当性が高いという事か・・・私の勝ちだな！」

クククツと澪は細く笑った。

「何でそうなるんだよ！ジャンケンもしてねえんだぞ！勝手に勝敗をきめんな！」

なぜジャンケンが出てくるのかは不明だが、額に青筋を浮かべながら隼人が講義をする。が、それも一瞬で切り捨てられた。

「黙れ、私がルールだ！」

「キーツ！！ああもういい、時間がもつたない！！」

隼人は頭を掻きながら、そう言い残してさっさと教室を出て行った。

隼人を見送った澪が、一言

「食えん男だ」

と周りに聞こえない程度の声で呟くと、クルツと厚樹たちの方を向き、何事も無かったように再び挨拶の言葉を投げかける。

「やあ諸君、まったかね？」

結局話をするのは学校ではまずいだろうという事で、一度解散し、町で再び合流する事になった。

待ち合わせ場所は昨日の事件のあった通りに決まった。

正直あそこにはあまり近寄りたくなかったが、人目につかない場所という事でしぶしぶ了承した。

朝美は寮の自室に戻ると、青地でジーンズ生地のスカーツと薄い水色で薄手の半そでブラウスを取り出し、素早く着替える。戸口に向かう途中、白い小さめのポシェットを拾い肩に掛けると、そのまま戸口を出て待ち合わせの場所に向かった。

通りに着くと、すでに制服姿のままの澪が、通りの壁に背を預けて待っていた。

「どうやら厚樹はまだ来ていないらしい。」

「水籬君、お待たせ」

声を掛けると、澪はこちらに気がついて顔をこちらに向けた。

「来たか、厚樹はまだ来ていないがそのうち来るだろう。先に話を始めようかね。」

「そう言っただけは、少し考え込む素振りを見せてから話始めた。」

「まずは・・・神道君はどこまで異血者について知っているのかね？」

「そう言われて朝美は少し考える。」

「ん、不思議な力があって、人から疎まれてる。くらいかなあ・・・」

「ふむ、っと澪は一度頷くと、」

「どうやらほとんど何も知らないようだ。まあ無理も無いが・・・」

「そう無理もないのである。」

実際異血者は自分が異血者と分かると、その正体を隠してしまう。そのため他の異血者と関係を持つこと無く、何も知らないまま生涯

を終えることが多い。

朝美とて昨日の出来事が無ければ、こうして澪から話を聞く事も無かっただろう。

「異血者とは名前の通り、その血に異なるものが流れる者という意味だ。それは特殊な血であったり、魔物であったりとさまざまだ。」

そういつて澪は、おもむろに鞆からペットボトルを取り出した。

右手で取り出したその中身を左手にたらす。

ペットボトルからこぼれたのは水、しかしそれは左手を濡らすこととは無かった。

澪の左手の上には水が球体となって浮かんでいた。

「私の場合は特殊な血のほうだな、簡単に説明するところのように水を操作する能力がある。」

そう説明すると、今度は水球がペットボトルの中へと戻っていった。

「私のも血の方なのかな？」

朝美が自分の胸に手を当てて問うと、澪は難しい表情をした。

「残念だがそれは分からん、血に住まう魔物は休眠している場合が多くてね、今は魔物の気配が無くても後に出てくる場合もある。私の場合は一族が全員そうだからまず間違いないだろうが、まあ今は君の異血に関しては置いておくでしょう。」

と話を一度区切ると、澪は少し表情を引き締める。

朝美は息を吞んで姿勢を正す。

「さて、それで本題のフギンクロスについてだが、すでに承知の事実だが異血者は迫害されている。そして当然として異血者の中には協力し合うものが現われ、いくつもの組織じみたものが作られた。

そしてその三大勢力といわれるものが、ゾディアックナイツ、付喪、つくもそしてフギンクロスだ。」

「三大勢力・・・」

朝美はオウム返しに繰り返した。

自分の口で言うと、改めて自分がとんでもないものに目をつけら

れたと、実感が湧いて不安がよぎる。

「フギンクロスは特に大所帯の組織として有名だ。構成はトップにフギン、その下に大天使アーケエンジェルと呼ばれる4人の幹部、更にその下に各幹部が率いる直属の部隊があり、あとには下級異血者と一般人の構成員が存在する。昨日の奴は一般人の構成員だな。おおかた神道君の能力が殺傷能力の無いものだから、それで十分と思っていたのだからな。」

そう言うとき、澪は一人納得したようにうんうんと頷いた。

しかし朝美はそれを聞いて一つ疑問を持った。

「何で異血者の組織に一般人が？」

「ふむ、いい質問だ。それはフギンクロスの掲げる理念にある。フギンの理念は共存、つまり異血者と人との共同生活だ。ゆえに一般人が混ざっている。」

「じゃあフギンクロスって案外いい組織なの？」

朝美がそう聞くと澪は首を横に振る。

「一概にはそうとも言えん。共存を歌う一方で、逆に反旗を翻す者には異血者一般人区別無く徹底的な武力でもって排除するのがフギンクロスだ」

排除、つまりは皆殺しということだ。

それを聞いて朝美は思わずぞっとした。

少しの間沈黙が続く。

すると朝美の後ろからのんびりとした声が聞こえた。

「おまたせ、待った？」

澪と朝美が声の方に振り向くと、そこにはいつものごとくにこやかな笑みを浮かべた厚樹が、こちらに向かってゆっくり歩いてくる場所があった。

「遅かったな、なにあつたの・・・」

か、と続けようとしたところで、澪は厚樹の後ろに誰かが付いてきている事に気が付いて、眉を寄せる。

「厚樹、その後ろのは？」

澗が問いかけると、厚樹は照れたようにへへへっつと笑みをいっそう深める。

そしてまるで犬か猫のように、

「拾っちゃった」

そう言つて厚樹が横にどくと、そこにいたのは黒のハーフパンツに白の半袖Tシャツ、その上に深緑の半袖ジャケットを着込んだ小学生くらいの少年だった。髪は黒の少し前髪が長いショートヘアで、美少年と言つても過言ではない整った顔つきをしていた。

そして少年は慚然とした態度で言い放った。

「拾つてもらつた、昶あきだ、よろしくな！」

朝美はその光景を見て呆然としていた。

隣では澗が右手を顔に当てて、ため息と共に呟いた。

「また拾つてきたのか・・・」

「ま、また？」

朝美は思わず声を漏らした。

そして澗は渋い顔をして答えた。

「厚樹は落ちているものは何でも拾う性質でね、前に猫を拾つてきたときに、拾つた生き物はどうするものかと尋ねてきたので、つい責任をもって飼うものだと言つたら、それからというもの拾つた猫を次々と持つてきてね、おかげで我が家には猫が5匹いる。寮生活になつてからは拾つてこなかったが、まさか今度は人の子を拾つてこようとは・・・」

その話を聞いて朝美はぎよつとした。その話が真実なら厚樹はまさに、あの少年を『飼う』つもりでいるという事だ。

ここは人として止めなければと思うと、既に言葉が出ていた。

「ちょ、ちよつとまって！いくらなんでも人の子なんだから、交番にいつて迷子として預けるべきじゃ！」

しかし朝美の説得も厚樹にはどこまで通じているのか、

「え？でも迷子じゃないらしいし、ちゃんとダンボールに入ってたよっ」

それを聞いて朝美は一つの可能性に行き着いて、愕然とした。

(ま、まさかホームレス!?)

本人の目の前という事もあって口には出さなかったが、一度思いついてしまうとそれ以外には考えられなかった。

何とか考え直してくれるように説得を試みる。

「でもやっぱり警察とかに保護してもらった方が・・・」

しかし今度は、事の当事者からの返答が帰ってきた。

「大丈夫、俺も拾われることを了承した。」

「で、でも・・・」

と、なおも食い下がろうとした朝美の肩に漣がポンツと手をのせる。

「諦めろ、あれで厚樹は意外と頑固だ。説得が通じるくらいなら、我が家に猫が5匹もいる事態にはならんよ」

ガクツと顔を伏せた朝美だったが、すぐにまた顔を上げた。

「でも、ほら！山城君寮生なんだよ!？」

それは厚樹も考慮の内だったらしく、そうなんだよねと呟くと漣に視線を送る。

「漣、お願い」

そう言っつてやんわりと厚樹が微笑むと、厚樹にあまい漣の反応は即答だった。

「厚樹の頼みとあつては仕方ないな、任せたまえ!」

おもむろに懐から携帯を取り出すと、漣は早速電話を掛け始める。

「ああ、川原君、すまないが頼みがあつてね」

そう言っつて漣は誰かに何事かを頼んでいる様子だった。

そして最後に、電話に向かって眼鏡の奥の瞳をキラリと光らせてサラッと一言。

「問題ない、首を立てに振らなければアレが全校中に知れ渡るぞ、と水籬漣が言っていたと言っつてやれ、うむ、頼んだぞ」

そう言っつて電話を切ると漣はまぶしいほどの笑顔を厚樹に向ける。

「話は通しておいた、問題ないぞ」

もうだめだ、朝美はそう深く感じさせられた。

この二人を朝美一人でとめられるはずも無く、かくして昶の寮生活が確定した。

「それじゃあ僕は色々と買う物があるから、今日は失礼するよ」

「そういうことだ、厚樹は借りてくぜ！」

厚樹に続いて昶がそう言うのと二人は歩き出した。

しかし漣は少し眉間にしわを寄せながら、

「くっ、早速厚樹を呼び捨てとは生意気なガキだ・・・上の名は何というのだ」

ため息混じりにそう問うと、昶はこちらをちらと見ながら、

「竜門寺だ。機会があったら兄ちゃんの名前も聞いてやるよ！じゃあな」

「あな」

そっちの姉ちゃんもな、と付け加えて二人は去っていった。

「なんだかんだで結構かわいい子だったね」

一度諦めてしまえばあとはなるようになれ、とそう思って朝美が話かけると、そこで漣が何か考え込んでいるのに気が付いた。

「どうかしたの？」

不審に思つて朝美が問いかけると、漣がゆっくりと口を開いた。

「竜門寺、たしか今朝のニュースでやっていた放火された屋敷の家名だ・・・」

「えっ・・・」

思わず朝美は二人が去っていった通りを見るが、すでに二人の姿は無かった。

朝美はひどく嫌な予感がした。

そしてその予感は見事に当たる事となる。

第二章前編（後書き）

さあいよいよ第二章のスタートです。

今回は新たな主要人物を加え、異血者を取り巻く世界情勢を書いた感じになっています。

では次は第二章後編（ひよっとしたら中編になるかも・・・）でお会いできることを。

第二章後編

(ハア、ハア、ハア・・・)

全力で走っているせいか、体が悲鳴を上げるかのごとく呼吸が荒れる。

いっそ走るのをやめてしまいたかったが、後ろから聞こえる足音を聞けば足を止める気にはなれなかった。

走りながら竜門寺 昶は自分のした選択を激しく後悔していた。

こうなる事はなんとなく予想していた。

それなのに、つい救いの手を差し伸べてくれた厚樹に引かれて、その手を取ってしまった。

チラリと目を横にやると、厚樹が自分と同じように荒い呼吸をしながら走っている。

するとこちらの視線に気が付いたのか、厚樹がこちらを見て出合った時と同じ柔らかな笑みを浮かべる。

昶の家はそこそこの有名な家だった。だが昨晚の襲撃で家に火が放たれた。

昶は一人っ子で跡継ぎを死なせるわけにはと、家族が昶一人を逃がした。

その後、町で一夜を明かした。夜が明けて、戻るなど言われていたが家の様子を見に行った。

かつてあった広い屋敷は全てが炭となっていた。家族がどうなったか調べたかったが、警察がうるついていたので断念した。

保護を求めても良かったかもしれないが、人目につくのはまずいと思ったのでそのまま町の裏道に潜んだ。

ダンボールと新聞は意外とあったかいと以前読んだ本に書いてあったので、近くにあったダンボールで実践してみた。

6月の終わりとあってそこまで寒い時期ではなかったが、ダンボールに囲まれているとなんと心が落ち着いた。

だが心が落ち着いてくると、今度はこの先のことを考えてどんどんと不安がこみ上げてきた。

この先どうすればいいのか、家族の誰かが生きていてくれればあ
るいは、とも思った。しかし、先の焼け跡を思い出すと嫌な想像ば
かりが浮かんで、とても期待できそうになかった。

無性に泣きたくなった。だが、泣いたところでどうにもならない
と思うと、泣くのがもつたいたい気がした。下を向くと涙が出てし
まいそうだったので、上を向いた。

そのとき丁度前を通り過ぎようとしていた男と目が合った。
それが厚樹との出会いだった。

厚樹は顔に柔らかい笑みを浮かべると、

「君、いく当てがなくて途方にくれている子？」

といきなりの射抜くような言葉をかけてきた。

よほど泣きそうな顔をしていたのだろうか、そう思ったがとりあ
えず頷いておいた。

すると今度はとんでもない事を聞いてきた。

「つまり君『捨て人』？ 捨つてもいい？」

まるで人を犬か猫のように扱うその発言に、目を見開いた。

しかし厚樹の笑顔を見て知らず言葉が出ていた。

「拾われてやつてもいいぞ」

そうして昶は厚樹に拾われる事になった。

今にして思えば心が弱りきっていたのだろう。

一緒に買い物をしている間に抱いた感想が、そばにいと落ちつ
く人という事だった。

例えば悪いが言ってみればダンボールに入っている時の気分と似
た感じだった。

その微笑を見ていると妙に心が和む。

そしてそんな厚樹をこんな事に巻き込んでしまった。

後ろを見れば黒のジーパンに、これまた黒の革ジャンを着た男が、
ナイフを片手に追いかけてきていた。

だがその足取りは軽く、まるで狩りを楽しんでいるような雰囲気がある。

事が起きたのは日用品をあらかじめ買い揃えて、後は布団をどうしようかと話していた時だった。

上から下まで真っ黒の格好の男が、昶の方を見てニヤリと品の無い笑みを浮かべ、喜色に歪んだ口を開いた。

「みい〜つけたあ〜」

そういつて男は周りに人がいるにもかかわらず懐から一振りのナイフを取り出す。

果物ナイフ程度の大きさだったが、その柄はしつかりとした作りで、実的なものだとすぐに分かった。

周りからちらほらと悲鳴が聞こえ、近くにいた人が男から離れていく。

すると不意に昶の手が後ろに引つ張られた。

後ろを見ると厚樹が昶の手を引いて走り出していた。

「とりあえず逃げよっか」

そうして今の状態になった。

まず間違いなく後ろの男が昶の家を襲撃した犯人だろう。

おそらく家に子供の姿が無かったので周辺の町を探していたのかもしれない。

そう考えると、いよいよ家族が生存している可能性が絶望的に思えた。

厳しいが優しくかった父、朗らかで暖かい母、物知りで色々教えてくれた祖父母、なにかと面倒を見てくれたお手伝いさん、そんな家族ともう会えない。

そしてそれを奪ったのが後ろの男だと思つと、逃げているのが無性に悔しくなった。

昶は、走るのをやめた。

その時、漣と朝美は商店街の近くを走り回っていた。毘沙門北高校の南側には大きな商店街があり、学校から近い事から寮生の殆どその商店街で買い物をしている。

先ほど漣の元に水薙家の者から電話が掛かってきた。

話によると、黒い服装の男がナイフを取り出し、小さな男の子と高校生の男の子を追いかけていったとの事らしい。

漣の予想は的中した。

厚樹たちが去った後、ニュースのことを話していた。

「竜門寺・・・」

その名前に何か引つかかるものがあるのか、漣は右手を口元に添えて何度かその名前を呟いていた。

そしてその顔が急に跳ね上がる。

携帯を取り出し何か操作している。その指が不意に止まると、眉間にしわを寄せる。

「やはりか、私とした事が・・・こんなことを見落とすとは・・・」
「な、なに？」

漣の剣幕した表情に、ただならぬ気配を感じて思わず問いかけた。

「竜門寺は毘沙門園の異血者組合に所属している」

「え、それって・・・」

「そう、竜門寺家は異血の家系だ。まだ話していなかったが、異血者として知ることにもう一つ大切なものがある。」

朝美は急な話の変化に一瞬躊躇したが、何とか問う事が出来た。

「それは？」

「断血者だんけつしゃの存在だ」

「断血者って？」

そう問い返すと、漣の表情がより険しいものになる。

「断血者は名の通り、『血を断つ者』という意味、つまり異血狩りだ。断血者は本来は有害指定された異血者を狩るものだが、中には異血者なら誰彼構わず襲う連中もいる」

朝美はそれを聞いてすぐさま嫌な予想が頭に浮かんだ。

そしてそれを察したように漣が告げた。

「竜門の一族は断血者に襲撃され、そしてあの小僧は生き残った。おそらく家族が逃がしたのだろう、だが問題はその後だ。もし断血者が子供の存在を知っていたら、探し出して襲う可能性がある」

そしてその話から少しして電話が掛かってきたのだった。町の人の話によると、男は学校の北側の方に走って行ったとの話だ。

学校の北側には山がある。

厚樹が一緒という事は、人気のいない方向にと気を配って逃げているのだろう。

漣は正直な話、これ以上厚樹を異血関係の話に巻き込みたくなかった。

厚樹が忘れていている記憶には、おそらく厚樹の家で起こった悲劇の記憶が入っている。もし異血事に巻き込まれて記憶が戻れば・・・そう考えると一刻も早く追いつかなければと気持ちだけが先走る。

(ドガンー!!)

「ひゃっ」

爆音が聞こえて朝美は小さく悲鳴をあげた、前を見ると山のふもとから煙が上がっている。

そして煙に隠れるようにして何か大きなものが動いているのが分かる。

「何、あれ・・・」

「くっ、やはり出せるのか・・・竜門の一族にはその血に門を宿している。そしてその門を開くことで八種竜を呼び出す。そしてそれが出来るものに『八大竜王』の名が与えられる。ここしばらく竜門の一族には八大竜王を名乗れるものはいなかったが、最近その八大竜王の名が与えられた者がいたそうだ。まだ幼いために戦闘事には出てこなかったようだかな」

朝美はあらためて煙に隠れる影に目を向ける。

「じゃああれは・・・」

「おそらくあの小僧が出したものだろっ、うまく制御できれば良いのだが……」

そう言っつて溲は少し足を速める。

朝美も置いていられないように必死に足を動かした。

足を止めた昶を見て、厚樹も慌てて足を止めた。

昶は迷った。足を止めたのはいいがここで門を開く事に戸惑いが生じた。

場所は問題ない、山のふもと辺りなのか人気は少ない。

だが問題は厚樹だ。ここで門を開けば、確実に異血者であることが分かってしまうだろう。

異血者が人に嫌われているのは昶も知っている。

もし異血者であることがばれて、厚樹に拒絶されるような事になれば、あの笑顔が化け物でも見るよう顔に変わってしまうのではないかと思うと、どうしても踏ん切りがつかなかった。

そうして固まっていると男が話しかけてきた。

「おやあ？もう逃げないのかい？ようやくおじさんと戦ってくれる気になったのかな？」

男はさも楽しそうにクツクツと笑う。

そしてさらに口を開いて今度は厚樹に話し掛けてきた。

「そこにお兄さん、この子がどんな子か分かっているのかなあ？」

ニヤニヤしながら言う男の言葉に、昶は激しく動揺した。

「やめ……」

ろっと言っつとした言葉を、厚樹が出会ったときと変わらぬ落ち着いた口調で遮った。

「ん？昶が異血者ってことかな？」

「え……」

男も驚いた様子だったが、何より驚いたのは昶の方だった。

「おやおやあ、知っつててこんな子と一緒にいたんですかあ」

クツクツと男は腹を抱えて笑い出した。

そして笑いが収まると、一気に声のトーンを下げ、厚樹を冷淡な目で見る。

「異血者をかばうとは、もう同罪ですなえ」

危険を感じて昶は動いた。もう迷いは無い、どうしても厚樹が自分が異血者であると気付いたかは分からないが、それでも拾ってくれたのならもう迷う必要は無かった。

昶はハーフパンツの右ポケットから一振りのナイフを取り出した。折りたたみの式のナイフで、柄には竜の彫刻が施されている。

そしてそれを自分の左手の人差し指に当てて軽く引く。

ナイフは幼く薄い昶の指の皮を意図も簡単に裂くと、小さな切り傷を作る。

切り傷からは血が漏れ出し、小さな赤い玉を作る。

そのまま指を地面に向けると、赤い玉は昶の指を離れ地面に落ちると、小さな赤い染みを作る。

次の瞬間、赤い染みはまるで蔓草のように周りに広がり始める。

そうして出来たのは、複雑な模様で描かれた八角形の方陣だった。昶を中心に円が描かれ、その周りに中心のものより一回り小さい円を各頂点に八角形が、そしてその各円の中心に記号のような漢字のような文字が浮かぶ、他にも文字のようなものが大量に描かれ、方陣を彩る。

昶は方陣の中心で朗々と言葉をつむぐ。

「我、八竜の門を守るもの、今、開放のときが来た。開け震門しんもん！来い砲閃花ほうせんか！」

方陣の昶の右側の円が光だし、円の中心の文字が消える。

円の上に突如、こげ茶色をした拳台の大きさの物体が現われた。

それは、大きな種だった。

種からあふれ出すように蔓が伸び、その蔓が段々と一つの形を象っていく。

そうして現われたのは蔓で出来た大きな一体の竜の首、根元は樹

木のように地面に食いついている。

目に当たる部分から、蔓の合間を縫って暗赤色の光が漏れ出して、物々しい印象を与える。

男は砲閃花と目が合い固まっている。

「厚樹、下がって！」

昶がそう叫ぶと、砲閃花を見上げていた厚樹がこちらにチラと視線を向けてから下がった。

それを確認すると昶はそのまま砲閃花に命令を下す。

「撃て、砲閃花！」

(ゴゴゴゴ……)

鳴き声は無く、代わりに植物の蔓が擦れ合う音が響いて、砲閃花は大きく口を開ける。

そしてその口から突如として緑を帯びた閃光がほとばしる。

(ドガンー！)

すさまじい轟音が轟いて、煙が舞い上がる。

終わったかな、昶がそう思った時だった。

「危ないなあ、もうちょっとで死んじゃうところだったじゃないかあ」

クツクツと笑いながら姿を現したのは先ほどの男だった。

パンパンと服の砂埃を払っているが、体のどこにも傷はない。

避けられた、つと瞬時に悟った。

「うーん、おしかつたねえ、威力は申し分ないんだけど撃つのにあんなに時間がかかちゃねえ、断血者には当たらないよお？」

断血者はただの人間、しかし異血者を相手にする彼らは決まって身体能力が高い。

そんな彼らを相手に、ただ強い力をぶつけるだけでは到底勝つ事など出来ない。

それが経験の差、昶が経験をつんでいれば相手が攻撃をかわせない状況を作り、そのうえで攻撃を仕掛ける事も出来ただろうが、昶はまだ12歳。普通の子供ならようやく小学生を卒業するくらいの年齢である。戦闘経験などあるはずもない。

そうして男はナイフを構えなおす。

「それじゃあそろそろ終わりにしようか！」

そう言うやいなや、男は昶に向かって一直線に走り出す。

男と昶の距離は遠くも近くもない距離、男の足なら直ぐにでもナイフの間に持ち込めるだろう。

昶は慌てて砲閃花を使い砲撃する。が、ただ放つだけの昶の攻撃は簡単に避けられてしまう。

見る間に距離が詰められていく、しかし猛然と走る男の前に進路を遮るように誰かが割ってはいる。厚樹だ。

「一般人はすつこんでる！」

そういつて男は目の前の八工を払うかのように、ナイフを持った右手を左から横薙ぎに振るう。

「厚樹、だめっ！」

昶が思わず叫ぶ。

が、ここで男にとって予想外のことが起きた。

目の前の少年が横薙ぎの一撃を、身を少し引いて避けた。

そしてあるう事かそのまま右手の拳を、こちらの左頬に叩き込んできた。

(ゴスッ)

あまりの展開に男は思わず頬に左手を当てて、痛みを確認する。

ジンジンとする痛みは、正確に拳が頬に当たった事を物語っている。

まぐれではない、その確かな痛みにも男は確信を得た。

すると少年はこちらを警戒しつつ顔を半分後ろに向けると、後ろの子供に向かって言葉を飛ばした。

「大丈夫、体育では負けた事がないんだ」

それは紛れもない事実だった。

しかし勝った事もなかった。

そう、全部引き分けだったからだ。

「俺との戦闘が、体育の授業と同じ扱いとはねえ」

そういつて男は再びナイフを構えなおした。

先ほどのほただこちらが油断しただけ、そう思い男は再び厚樹に右のナイフを振るう。

またも身を引くことで避けられるが今度は問題ない、避けてナイフに目が行っているところに、今度は左の足で右太腿を狙って鋭い蹴りを放つ。

厚樹の体が足を蹴られて右へ傾ぐ、そこへ止めを刺すべく先ほど避けられたナイフを振り上げ縦に振り下ろす。

「うわっ」

厚樹が小さく悲鳴を上げると、傾いだ体をそのまま横倒しにするように伏せ、体を後ろに転がす事でナイフを避ける。

「くそっ！」

避けられた事に腹が立ったのか、男はそのまま大股で厚樹に駆け寄り振りかぶった右足を繰り出す。

（ガスッ）

音が響いてそのまま厚樹の体が面白いように吹っ飛ぶ。そのままゴロゴロと転がり、先ほどの砲閃花の砲撃で飽いたクレーターに転がり落ちる。

「いたたた・・・」

厚樹は蹴られた右半身をさすりながら体を起こす。

そして事は起こった。

クレーターの中心部から上を見上げた時だった。

何にか見たことのある光景だなぁとのん気に思った瞬間、頭に鋭い痛みが走った。

（前に見た、どこだったか、そうだ父さんと母さんがいなくなる前、こうして穴から上を見上げていたんだっただけ）

そうして厚樹は一つ疑問に感じた。

（その前は何をしていたんだっけか・・・父さんと遊んでいてそれで急に今みたいに頭が痛くなってそれで・・・それで・・・あ・・・）

そしてどこからともなく、低い獣のようなかすれた声が聞こえた。「やっと、思い出したか？」

次の瞬間厚樹は喉が裂けるかと思うくらいの叫びを上げた。

「うわああああああああ！！！」

厚樹が穴に落ちて大丈夫だろうかと思っていた昶は、その悲鳴を聞いて心臓が跳ね上がった。

まるで獣の咆哮のようなその悲鳴は最初誰のものか分からなかった。

それは男にしても同じのようで驚愕を顔にあらわにして辺りを見回している。

そしてその叫びが、穴から聞こえてくる事で厚樹のものだと分かった。

「おやおや、これは腕の骨でも折れちゃいましたかねえ？」

そう言っただけ男は、厚樹の転がって行った穴に下りていった。

昶は穴に下りていった男を止めようと、砲閃花で攻撃しようとも思ったが、また避けられて終わるかもしれないし、なにより今撃てば厚樹も巻き込んでしまうかもしれない。結局何も出来ずにただ立ち尽くすしかなかった。

「ぐあああ！！！」

またもや悲鳴が聞こえて、一瞬ビクツと身を縮める。

しかしどうも今の悲鳴は厚樹のものではなく、男の叫びのように聞こえた。

男の叫びから一転いまは怖いくらい物音一つしない。

昶は警戒しながら様子を見ようと穴に近付いた。

そうして最初に目に飛び込んできたのは一面の赤だった。

見れば男の体が近くに転がっていた、右腕が肩口からごっそりと欠落した上半身だけの状態で。

昶は身の毛のよだつ光景に思わず口に手を当てて視線を逸らした。

しかし厚樹がこの中にいるのだという事を思い出して、男の残骸に視線がいかないようにして厚樹を探そうと視線をさまよわせる。幸いにもすぐに厚樹を見つけることが出来た。

穴の中に仰向けの状態で倒れている。

男の血で汚れていてここからでは無事は確認できないが、男のような大きな体の損害は見られなかった。

昶は小走りで厚樹に駆け寄った。

穴に入るとよりいっそうの嘔せ返るような血の臭いに気分が悪くなる。

なんとか厚樹のもとにたどりつく、手を口元へやる。

暖かい吐息が手に当たった事を確認してひとまず安堵する。

とりあえずこの穴から出ようと厚樹を背負うが、いくらひよろりとした印象のある厚樹でもそこは高校生、小学生程度の昶には厚樹を背負って穴を出るのは難しかった。どうしようかと考えていると、不意に上から声が聞こえた。

「大丈夫か!？」

上を見上げるとそこには、先ほど厚樹と一緒にいた銀フレームの眼鏡をした男がいた。

澗が山のふもとにたどり着くと、そこには穴がいくつも開いた地面と、物々しい蔓で出来た竜がいるだけで誰も居なかった。

竜は恐らく昶が出したものだろつと検討をつけて、辺りを見回す。すると穴の一つから、何かを引きずるようなかすかな音が聞こえて慌てて駆け寄る。

中をのぞくと、赤く汚れたクレーターの緩やかな坂を昶が厚樹に潰されるような形で登っていた。

「大丈夫か!？」

澗が声を掛けると、昶がこちらに気が付いたのか顔を上げた。

「兄ちゃん・・・」

昶が弱々しい声を上げる。その声は震えていて今にも泣き出しそうだ。

無理もない、いくら態度が出がでかい異血者といえど彼はまだ12歳だ。

こんな血の臭いの立ち込める場所で、平然としていられるはずもない。

澪はすぐさま駆け寄ると、昶から厚樹を受け取り肩に担ぐと、坂を登り始めた。

遅れて現われた朝美が穴の中を見て、ひっと小さな悲鳴を上げる。その横を、厚樹を担いだ澪が通り過ぎる。

「とりあえず私の家に行こう」

「う、うん」

朝美は搾り出すようにして、なんとか返事をする。

「お前もとりあえずうちに来い」

そう昶に向けて澪が言うと、昶は何も言わずにコクリと一度だけ頷いて、澪の後を追った。

そうして一同は穴だらけになった山のふもとを後にした。

第二章後編（後書き）

以上で第二章終了です。

ついに主人公の厚樹が本動き出すのですが、

まあ今回はそのさわりの部分になります。

本格的な部分は第三章からになります。

では次は第三章前編でまたお会いできる事を。

第三章前編

（第三章：気高き獣）

（カコーン・・・カコーン・・・）

静寂が支配するこの空間で、ただ唯一庭に備えられた獅子脅しだけが規則的な音を発している。

高い塀に囲われた庭には砂利が敷き詰められ、その中央に鯉が泳ぐ池がある。

そしてその池のすぐそばに獅子脅しが備え付けられている。

しんと静まり返った屋敷には神社や寺に似た独特の空気が漂っている。

今いる部屋は畳が敷き詰められており、周囲は障子で囲われている。

そんな純和風の部屋で、朝美は少し緊張した面持ちで座布団に正座していた。

隣を見ればさすが名家の跡継ぎと言っただけあって、昶が慣れた様子で静かに正座をしている。

部屋の隅には、黒いスーツを着込んだ見るからに堅気の間人ではない男が、二人を見据えるように座っている。

朝美は正直早くこの部屋を出たいと思った。

ここは溇の実家の屋敷で、倒れた厚樹を背負った溇が取り敢えずと言って、ここに立ち寄ることになった。

屋敷に入る時の事を考えると、逃げ出したい気持ちの方がよりいっそう高まった。

屋敷に入るとき最初に自分たちに気が付いたのは、門の前に佇んでいた門番だった。

門番は血まみれの厚樹とそれを背負う溇を見て激しく動揺した様子だった。

「わ、若！それに厚樹坊ちゃんまで！一体どうなさったので！？」
そう言つて駆け寄ると男は、見知らぬ人間が二人付いてきている事に気が付いたのか、鋭い視線をこちらに向けてきた。

「貴様らか！若と坊ちゃんにこんなことをしたのは！！」

そう怒声を上げるや否や、懐から黒塗りの拳銃と取り出す。

「ひっ！」

朝美は思わず身を縮めて小さな悲鳴を漏らす。

しかし男の行動をさらに強い怒声が阻んだ。

「やめる片岡かたおか！それより今は厚樹の方が先だ！！」

「は、はい・・・」

溲の怒声に片岡は銃を懐にしまうと、納得のいかない目でチラと朝美と昶を見て、

溲から厚樹を受け取つてそのまま屋敷に入つて行つた。

「ひとまず、君らも入りたまえ」

そう溲に促されて二人は溲の後ろについて屋敷に入った。

屋敷に入ると、靴を脱いで上がったところに、一人の老人が両膝を床に付けて座っていた。

目を薄く開け、口元が豊富な髭に覆われた老人で、溲の帰りを待ちわびたように出迎えた。

「お帰りなさいませ、若。外で何か事が起きたようですな」

「ああ、私は厚樹の様子を見に行く。この二人を客間まで案内してやつてくれ」

「承知しました」

老人との会話を終えると、溲がこちらを振り返つた。

「と、いうわけだ。悪いがこの古水ふるみずの後について、客間で待っていてくれ」

そう言つと溲は、こちらの返事を待たずに、廊下の奥へと消えていった。

「では、参りましょうか」

促されて、二人は素直に老人の後に続いた。

そうしてつれて来られたのがこの部屋だった。

息が詰まりそうなほどの沈黙が続く中。

不意にスツと廊下側の襖が開いた。

「待たせたな」

そう言っただけで部屋に入ってきた澪は白の浴衣のような着物を着ていた。

いつもの勝手気ままな雰囲気なりを潜め、凜とした空気を纏っている。

長い沈黙が続いていた事も手伝って、早速朝美は話を振った。

「あの、厚樹君の様子はどうなの？」

その質問に、昶も気になっていたのである。伏せていた視線を澪に向けた。

凜とした表情を少し柔らかく崩して、澪が厚樹の無事を告げる。

「安心したまえ、外傷はどこにも見当たらなかった」

しかしここで、不意に澪の表情が引き締まる。

「だが、いまだに目を覚まさない・・・何があつたか話してもらおうか」

そう静かに告げると、澪は口をつぐんで昶をじつと見つめる。

しばしの沈黙の後、昶が口を開いた。

「・・・正直なところ俺にもよく分からない・・・断血者に追いかけて、俺が戦ってみたけど全然相手にならなくて、そしたら厚樹がかばってくれて、戦ってる最中に厚樹が穴に落ちたんだ。そして穴から厚樹の悲鳴が聞こえて、断血者が穴に入ろうとして、俺止めようと思ったんだ。でも出来なかった・・・そしたらまた悲鳴が聞こえて、一瞬厚樹かと思ったんだけど、どうも断血者の悲鳴っぽくて、その後物音一つしなくなって、不安になって・・・様子、見に行ったら・・・周り血まみれで・・・その中に・・・厚樹が・・・倒れてて・・・それで俺・・・」

その後は言葉にならなかった。

静かな部屋に、ただ昶の呻くような泣き声だけが響いていた。

朝美はそつと昶に寄り添うと、彼の震える両肩に手を添えた。
無理もないと思った。

まだ幼い子供が、突然家と家族を奪われ一人ぼっちに。
そのうえ、多少おかしな成り行きではあるものの、自分を拾ってくれた人が、自分の為に、大怪我を負ったかも知れないとあっては、内心いつ泣き出してもおかしくない状態だったのだろう。

そんな状態で先ほどまでのように、落ち着いた振りをして座っていたのかと思うと、いたたまれない気持ちになった。

そしてここで漣が、そんな昶を見てとんでもない事を口にした。

「まあ無理も無い反応か、女の子にしてはよく我慢した方だな」
ビクツと朝美が両手を添えていた肩が一瞬大きく震えた。

「……え？」

予想外のセリフに、朝美の一瞬言葉の意味が分からなかった。

「……女の……子？」

まさかとも思ったが、さっきの一瞬の反応からすれば間違いないだろう。

そう思つてよく見れば、昶の体の周りを薄い影が取り巻いている事に気が付いた。

おそらく厚樹やフギンのリーダーなど、最近影の濃い人間によく出くわすので、薄い影に気が付かなかつたのだろう。

そしてその反応を、漣も見ていたのだろう。

「ふむ、やはり事実のようだな。竜門寺家で最近『八大竜王』の名を与えられたのは女の子で、現在12歳という話だったのでな」

「……」

昶が黙り込む。

そして観念したように、ポツリと言葉をこぼした。

「家の風習なんだよ……」

「風習？」

朝美が聞き返すと、答えを返してきたのは漣だった。

「幼いころに異性の格好で育てると丈夫に育つ、というやつか」

昶は黙って小さく頷いた。

しかし、すぐにハツとしたように顔を上げる。

「それより厚樹には会えるのか!？」

昶の声とほぼ同時に、廊下側の襖が開いた。

姿を現したのは、先ほどの古水と呼ばれていた老人だった。

「お話中に申し訳ありません。厚樹様が目を覚ましました」

「そうか、ちょうどそちらに行こうと思っていたところ・・・」

話している途中で、口を止めた澁を不信に思い、視線を向ける。

「何か問題が起こったのか？」

「お察しのとおりで、少々厄介なことになりました」

そう言って、古水が気まずそうに視線を落とす。

「言え」

澁が短く言って、続きをうながす。

「・・・潜妖せんようが目覚めたようです」

「なっ、なんだと!くそっ!!!」

澁が悪態を付いて部屋を飛び出していった。

「せ、潜妖って?」

朝美は澁が飛び出していった入り口を、半ば呆然と見ながら古水に問いかける。

だが、これに答えたのは昶だった。

「血に住まう魔物のことだ!うちらも行こう!」

そう言うやいなや、朝美の手を引いて、澁の後を昶が追う。

すでに澁の姿は無かったが、廊下に響く足音が、澁の位置を教え
てくれた。

足音を追ってしばらく走ると、廊下の奥を右に曲がったところで、
足音が途絶えた。

ようやく部屋に着いたかと、廊下を右に曲がる。

見えたのは開け放たれた襖と、その向こうに広がる部屋、そして
その部屋に敷かれた布団。

その布団に上半身だけを起こして座っているのは、見知ったはず

の見知らぬ青年。

青年の右側には虎のような獣、だがただの虎でないのは一目瞭然だった。

白い毛並みに薄い深緑の縞模様、長くとがった耳、体と同じく縞模様をした三本の尾、そして極めつけは昆虫のような球形をした翡翠の四つの目。

だが獣よりも目を引くのは青年の顔だった。

普段、笑顔が常に浮かんでいた顔には、今はその面影すらない。そこにいたのは能面のような無感情な顔をした厚樹だった。

「こつちにこないで……」

一瞬厚樹が出したとは思えない、背筋がゾツとするような無感情な声が聞こえた。

すると周辺の空気が動くのがわかった。

空気がゆっくりとではあるが、厚樹の方向に流れているのがわかる。

「二人とも伏せる！」

漣が振り向きざまに、朝美たちに向かって叫ぶ。

「え？」

朝美はわけがわからず反応が遅れた。

次の瞬間、厚樹に向かって流れていた空気が、朝美たちのいる廊下に向かって一気にあふれ出した。

「ねえちゃん！」

「ひゃっ！」

昶に手を引かれて慌てて身を伏せる。

（ゴオオオ……）

朝美の上を塊となった空気が、その余波を残しながら駆け抜ける。（ズゴオオン！）

轟音が響いて後ろ見やると、木造の壁が見事に吹き飛んで穴が開いている。

「厚樹！とりあえず落ち着け、何があったというんだ！」

澪が悲痛な叫びを上げるが、それに返ってきたのは、底冷えのする冷たい声。

「落ち着けて？落ち着いていられるわけが無いじゃないか・・・」
言葉とは裏腹に、傍目から見た厚樹は妙に落ち着いている。

そして自嘲気味に、クスクスと笑い声を上げる。

「父さんと母さんは僕を置いて出て行った・・・本当に、都合の良い記憶に摩り替わったもんだね・・・自分の夫を消し飛ばされたんじゃない、そりゃあ母さんも逃げたくなるよね・・・」

澪は目を見開いて驚愕した。

「厚樹、お前記憶が戻ったのか・・・」

「うん、おかげさまでね。ついでに自分の異血まで目覚めちゃったみたい」

そう言つて厚樹は自身の右側にいる翡翠の四つ目をした虎を見る。視線に気が付いたのか、伏せていた首を持ち上げ澪たちの方を見る。

「せっかく我が主が目覚めてくれたのだがな、不慮の事故で記憶と共に再び封印されてしまつてな。不本意ながら今まで外に出れなんだ」

低くよく響く声音で古風な言葉を発したのは、紛れも無く厚樹の横に伏せる虎だった。

「虎が喋った！？妖魔つてみんな喋るの？」

朝美一人がひどく驚いた声を上げた。

その問いに、その左隣でいまだ伏せた格好のままの昶が答えた。

「妖魔といつても、元は昔話にでてくるような神様が創った神獣らしいからね、人語を話すくらいは一般的らしいよ」

「なかなか博識なお子だな。我が名は『天餓てんがの咆哮ほうこう』ジルゼノク。大気を震わす気高き神獣よ」

ジルゼノクはそう高らかに己の名を告げた。

第三章前編（後書き）

前回の投稿からだいぶ間が開いてしまいました。
まことに申し訳ないです。

今回は厚樹の異血がついに登場です。

今後はようやく厚樹が主人公らしく話にかかわっていきます。
次回第三章後編でまたお会いできることを。

第三章後編

ジルゼノクは主である厚樹に視線を向ける。

「主よ、これよりいかなさるか？」

「うーん、どうしよつか。今までは父さんと母さんが帰るまでに普通の子にとって努力したんだけど・・・これじゃ帰ってきそうにないしねえ。むしろ帰ってきててもこんなバケモノじゃすぐにまた逃げちゃうよね・・・」

ハハハ・・・と厚樹が乾いた笑いをこぼす。

厚樹は途方に暮れていた。

今までは自分が不出来なばかりに、親に捨てられたのだと思っていた。

母親に言われた、『普通の子だったらよかったのに』という言葉は今でも鮮明に覚えている。

その言葉のために自分なりに色々と努力をしてきた。

自分が普通のいい子になれば両親が迎えに来てくれる。

そう信じて。

が、それはすべて無駄だった。

母親の言う『普通』とは純粋な血と言う意味だったのだ。

いかに努力しようとも自分の血を変えることはできない。

つまりは母親の訴えは実現不可能なものだったのだ。

もう自分には何もできない。

今まで支えにしてきたものが一気に崩れ、生きる目的を失った。

まさにそんな気分だった。

そして厚樹の頬を一滴の涙が流れる。

しかしここで、予想外の声が掛けられた。

「私たちじゃだめなの？」

厚樹が伏せていた顔を、声の方向に顔を上げる。

顔を上げた先にいたのは、目を潤ませ今にも泣きそうな顔をした

朝美だった。

「たしかに、山城君のご両親は、もう迎えに来ることは無いかもしれないけど・・・でも山城君には、山城君が異血者と分かっていても、親しくしてくれる人がいるじゃない！水籬君は厚樹君を心配してくれてるし、それに昶ちゃんなんて、さっきまで厚樹君のために涙まで流してくれてたんだよ？だから自分をバケモノだなんて言って壁を作らないで・・・そうやって一人になろうとしないで・・・」
一人って結構つらいんだよ？そう最後に付け足して、朝美は自嘲気味に苦笑いを浮かべる。

そんな朝美の表情を見て、厚樹は先の話が朝美の経験からの話だろうと、漠然と思った。

そう思うと、不思議とその言葉がストンと、心に収まった気がした。

するとその横にいた昶からも声上がる。

「俺を拾ったのはお前だからな！最後までちゃんと責任もってくれよ！！！」

「ふん、事情を知る人間が聞けばかなりの問題発言だな。すまないな厚樹、私はお前が異血者だと知っていて隠していた・・・だが、だからこそ私は厚樹に対して今さら何も思わんよ。だいたい厚樹がバケモノなら私も、いや、ここにいる全員がバケモノだぞ？」

そう言っつて溲は肩をすくめて見せた。

ククク・・・と、どこからか忍び笑いが聞こえる。

振り向くとそこには口元を緩めた虎がいた。

「どうやら主は良いお仲間をお持ちのようだ。主よ、私がいては不満かな？」

「君の事何も考えて無かったね、ごめん。僕が拾ったわけじゃないけど、飼いだした生き物は最後までめんどろみよ」

そう言っつて厚樹はいつもの和やかな笑顔を浮かべた。

そんな厚樹に虎も笑い返す。

「主にかかれば我も猫同然か、これは頼もしいことよ」

「さて話が落ち着いたところで、しっかりと自己紹介しておこうか。小僧にはまだ何も話していないのでね」

そう溲が切り出すと、そういえばそうだったと、朝美も未だ名を告げていないことに思っていた。

「私は厚樹の親友の水薙 溲だ。とりあえず今は、小僧ということにしておいてやる」

「？」

溲の言葉に厚樹が首をかしげる。

それに気が付いた朝美が、ごまかすように慌てて自分の紹介を始める。

「私は神道 朝美、山城君のクラスメート、っていつてもまだ転校してきて二日目なだけどね」

「俺も改めて自己紹介をしておく、竜門寺 昶だ。よろしくな」

そう昶が続けると今度は厚樹がそれに続こうとする。

「僕は……」

「厚樹、いまさらお前が自己紹介をする必要は無いと思うぞ」

「……」

また自己紹介させてもらえなかったことに、少しムスツとした厚樹を尻目に、溲は厚樹の横に身を伏せる虎に話しかけた。

「ジルゼノクといったか、先ほどの事から察するに風か何かの能力か？」

「ふん、主でもないものに答える義理はない」

「言うではないか、この飼う猫風情が」

「なっ！ 飼う猫とは、誇り高き神獣に向かってなんと無礼な！！」

「猫同然と言ったのは貴様であろう、最近の神獣は記憶力が乏しいようだな！！」

「言わせておけば調子に乗りおつて、この小童が！！」

ジルゼノクは伏せていた身を起こすと、凄まじい形相で溲を睨み付ける。

まさに一触即発のこの状況で、緊張感の無い声が間に割ってはい

る。

「まあまあジルもそんなに怒らないで、ジルの方が遙かに年上なんだから、ここはひとつ穏便にね。それに僕もジルのこと知りたいし」「む、主がそう言うのであらば、時にそのジルというのは・・・」「ああジルゼノクじゃ呼びにくいから、頭をとってジルにしたんだけど嫌かな?」

「滅相も無い!主に名を与えられるとは喜ばしきこと、ぜひその名で及びくだされ」

そう言うジルは本当に嬉しそうな顔をしている。

そんなジルに澁が再び質問を投げかける。

「ではジル、先ほどの質問の答えはどうなのだ?」

「き、貴様!主に与えられし名を易々と!..!」

「ジル、普通名前は呼んでもらうためにあるんだよ?」

「そ、それはそうなのですが・・・」

「さあ答えたまえジル君!」

「むう、今に見ておれ小童め・・・」

そうジルが苦々しく呟く。

「なんかこの三人(二人と一匹)いいコンビだね」

朝美が能天気になんな感想をのべる。

「そう?いつか流血ものの喧嘩になりそうな気がするけど・・・」

そう昶が後に続けた。

そしてジルは、少し居住まいを正すと質問に答えた。

「私の能力は風とは似て非なるもの、それは大気だ」

「大気・・・」

厚樹が転がすようにその言葉を転がした。

「つまりは、空気そのものを操作する能力?」

「さすがは我が主、お察しの通りで」

そこで朝美が、そういえばと昶を見る。

「昶ちゃんたちのいた所に、植物の竜みたいなのがいたけど、あれは昶ちゃんが出したんだよね?」

「そのちゃんつての、どうにかならないかな」

「あ、ごめん昶君だね」

昶はすこし決まりが悪そうな顔をしながらも、質問に答える。

「あれは砲閃花、他に7種で合計八匹の竜を召喚できる。だから『
八大竜王』」

「それであの竜はジルさんみたいに喋らないの？」

それには当のジルが答えた。

「召喚獣というのは神獣とは異なる。中には神獣の召喚獣もいるが、
召喚というのは術者が、呼び出すための力を負担しなければならな
い。そのため神獣は召喚には力の負担が大きく不向きなのだ。よっ
て喋る召喚獣は殆どおらぬ」

「私の時に比べてやけに素直ではないかね？」

「ふん、このお嬢は貴様と違って、礼儀というものをよく理解して
いるようだったのだな」

「なんとも心の狭い神獣様だな」

「ぬぬぬ・・・」

厚樹の前とあって、何も言い返せないジルを置いて、漣は話に幕
を下ろしにかかった。

「さてそろそろ帰らないと寮の門が閉まるぞ。小僧のことは話を通
してあるから、表から堂々も行っても問題あるまい」

「そうだね、そろそろ帰らないと夕飯が、あ、漣ごめんね、壁・・・
」

「あああれか、まあ父のことだ、厚樹がやったと言えば笑顔で許し
てくれるだろう。気にするな」

「うん、ありがと。それじゃ時間ないし、お先に失礼するね」

厚樹がそう告げるとジルが厚樹の前に進みでる。

「時間が無いのであろう？背に乗られよ、人気の無いところまでな
らお送りする」

「昶も一緒だけど良いの？」

「一人増えたところで変わりはせん、さあ急がれよ」

「ありがと。昶行くよ〜」

そう言って、ジルの背に飛び乗る厚樹に、昶も戸惑いながらも後
に続く。

「それじゃまた月曜日に学校でね、おやすみ〜」

「では、確と捕まっつていられよ」

そして次の瞬間には、家の廊下を駆け抜け庭に飛び出すと、三本
の尾をなびかせて、ジルは二人を乗せて空高く舞い上がった。

後には疾走の余波が残り、朝美はなびく髪を手で押さえて、厚樹
たちが消えた空を見やる。

「私も乗ってみたかったかな・・・」

行き先は、男女の違いはあるものの同じ寮なのに、そんなことを
思っていた。

そしてふと、隣で溼が固まっているのに気が付いた。

「水薙君？・・・どうかしたの？」

「今、背に乗っていたな」

「うん、気持ちよさそうだったね」

「そうではない！」

「え！？」

急に大声をだした溼に、朝美はたじろいだ。

「潜妖というのは本来背後霊のようなものだ。術者の血に住み着い
て異能を与えるが、実体が無いため出来ても会話をするくらいだ！」

「え、じゃあ水薙君が平気でジルさんを煽ってたのって・・・」

「そうだ、実体がないから怒ったところで何もされない、いや、何
も出来ないと高をくくっていたからだ！だが奴には実体がある。潜
妖としてありえないことだ」

朝美はその事実には驚きながらも、反論を試みる。

「でも、昶君の竜は普通に戦闘してたじゃない」

「召喚獣は別物だ。あれは生きた妖獣を門を開いて呼び出すものだ。
潜妖は小僧が言っていたように、昔話に出ていたような神獣が死後、
人の血に魂のようなものが宿ってできるものだ。つまり潜妖は、基

本的にすでに死んだ神獣だ」

そこまで漣は一気に言い切ると、厚樹たちが消えた空をじっと睨む。

「じゃあジルさんは・・・」

「・・・おそらく、生きた神獣だ。明日、あの化け猫を問い詰めねばならんな・・・」

朝美には異血に関する知識が無いため、どの程度のことなのかは分からないが、漣の表情を見れば、かなり有得ないことだということとは理解できた。

その夜、昶は厚樹の寮室に入り、厚樹の普通症候群を目の当たりにする羽目になったのだった。

「なんかすごく普通の部屋だね・・・」

その言葉の意味が決して『一般的な部屋』という意味でないのと言うまでも無い。

そして記憶にありながら、誰もが触れなかったことが一つ・・・

(プルプル・・・)

鳴り響く電子音、男はその音を聞いて顔をしかめる。

彼は二つの電話を持っていた。

こちらの電話が鳴るときは、決まって仕事 came 来た時だった。

乗り気はしないが、出ないわけにも行かず渋々通話のボタンを押す。

(ピッ)

この電話は一方通行で、相手が話すだけで彼自身は何も答えなくてよかった。

彼はいつものごとく無言で耳を傾ける。

「一人の狩人のことでトラブルが起きました。問題があったのは

竜門寺家を個人襲撃した狩人です」

彼はそれを聞いてうんざりした。

竜門寺家はたしか有害指定されていない、おそらく一部の過激派の断血者が手を出したのだろう。

今朝のニュースから、襲撃が成功しているのは間違いない。

仕事はおそらくその過激派の捕縛あたりだろうかと予想した。

しかし電話の内容は予想外のものだった。

「今日、その狩人が死亡しました」

彼はその報告に目をむいた。

「犯人の候補は二人、一人は竜門寺家の生き残りの竜門寺 昶、もう一人は竜門寺 昶と共に行動していたと思われる山城 厚樹、両名とも異血者と確認されています。本部はこの二人を有害指定とし、両名の断血が今回の任務となります。ではご検討を」

そう言つて電話はプツリと切れた。

彼は電話が切れてもそのままの格好で固まっていた。

(ギリギリ……)

彼が電話を握る手に力を込め、電話が軋み悲鳴をあげる。

「何でお前が……くそっ！」

そうはき捨てて、彼は燃えるような赤髪を掻き毟った。

第三章後編（後書き）

さあついに第三章終幕です。

今回は厚樹の異血者としての立場が確りとしたものに成りました。ここからいよいよ異血者としての厚樹を中心物語が回り始めます。では次回第四章前編でまたお会いしていることを

第四章前編

〔 〕 第四章：有害指定

暗闇の中、明かりが見えた。

赤色の光は何かを求めて、蠢くように揺れている。

次第に光が大きくなっていく。

その過程で、光の正体に気が付いた。

それは炎。

赤く燃え上がる炎は、今も周囲の闇を取り込むかのように大きくなっていく。

炎は足元まで迫ってきていた。

しかし体は石になったかのように、ピクリとも動かない。

動け、動け、と心の中で念じるが、体はまったく言う事を聞かない。

まるで自分の体ではないみたいだった。

炎はついに足に辿り着き。

一気に体を飲み込もうと這い上がる。

（バサッ）

気が付くと、そこは見慣れない部屋。

「起きた？」

声がして後ろを振り返ると、リビングと一体になったキッチンにいた厚樹と目が合った。

それでようやく昶は、厚樹の寮部屋に居候する事になったのを思い出した。

（夢、か・・・）

少しほっとして息を吐く。

どうやら自分が思っている以上にトラウマになっているようだ。異血者である以上、いつかこんな事になるのではと思っていた。

が、それは予想以上に急だった。
失ったものは、あまりに大きい。

そんな事を考えていると、再び寂しさがこみ上げてきた。
そこへそれを察したように声がかかる。

「寂しい？」

考えに耽って、いつの間にか沈んでいた視線を、再び前にやる。

厚樹はお盆を抱えて、こちらを覗き込むようにしていた。

「正直いえば少しね・・・でも大丈夫。今は厚樹がいるし！」

少し強がって無理に笑顔で言ってみせた。

厚樹は少しの間、昶をじっと見つめる。

そしてその表情が、不意にいつもの笑みに変わる。

「ご飯にしょっか」

そう言って、お盆をリビングの中央にあるテーブルに置く。

お盆に載っているのは、見た目にも見事な和食だった。

「厚樹料理作れるんだ・・・」

「うん、簡単なものなら大抵作れるよ」

厚樹はそう言うが、味噌汁や綺麗に焼かれた出汁巻き卵を見れば、

その腕が確かである事は明白だった。

味を想像すると、見ているだけで食欲が出てきた。

昶は少しまって、と厚樹に告げると洗面所である程度身支度を

整える。

「おまたせ」

席について昶がそう告げると、厚樹が両手を合わせる。

「それじゃ、いただきます」

厚樹と共に合掌すると、さっそく昶は味噌汁に口をつけた。

具は揚げと豆腐とネギの普通の味噌汁だが、香り立つ味噌の香り

は心地よく、味も予想に違わずおいしい。

しばらく黙々と食事をしていたが、昶はどうしても気になって、

遠まわしに厚樹に尋ねた。

「ねえ、なんかこの部屋妙に狭く感じない？」

「そお？んゝさすがに溇や昶の家に比べると狭いかなあ」

「あ、いや、そういうことじゃなくて……」

そう力無く呟いて、周りを見渡す。

目に付く家具は、全て普通のものだった。

寮室という部屋でなければ。

そう家具はサイズが全て普通の大きさ。

しかしそれは普通の一軒家に置く場合の話だ。

この部屋はあくまで寮で、そんなに広くない。

まして本来なら一人暮らしの部屋である。

そんな部屋に、4〜5人が座れるであろう机と椅子。

タンスにしても一人分の服を入れるには大きい。

要するに全ての家具が一人暮らしの小部屋には大きいのだ。

そのため厚樹の部屋は妙に狭い感じがする。

しかし本人に自覚は無いらしい。

昨日溇たちとの会話を聞いていて、普通というものに妙に執着があり、かなり頑固な性格であるだろうと推測した。

おそらく何を言ったところで、これはどうにもならないだろうと、

説得は早々に諦めた。

すると今度は厚樹の方から話しかけてきた。

「昨日はちゃんと眠れた？」

そう言われて昨夜のことを思い出して思わず赤面する。

昨夜は眠るところの話ではなかった。

寝る場所が無く、寝床を用意するまでは一緒に寝ようと厚樹が言い出したのだ。

厚樹にはまだ告げていないが、昶は女の子である。

まだ幼いとはいえ、男の人と寝起きを共にするのは恥ずかしい。

厚樹は男同士とと思っているのだから、下手に拒否するのも躊躇われる。

結局了承して同じ布団に入ったはいいが、なかなか眠れなかった。だが、そんな事実を話せるはずもなく、昶は無理でも笑顔を浮か

べる。

「うん、よく眠れたよ！前は布団がダンボールと新聞だったからね！」

「そっか、今度二段ベッドでも探してくるよ」

そう厚樹が宣言したところで、厚樹の胸ポケットから電子音が鳴り響く。

胸ポケットから取り出したのは、折りたたみ式の黒い携帯電話。

厚樹はたたまれた携帯を開き、通話ボタンを押して携帯を耳に当てる。

「もしもし？」

「ん？」

「ああ、いいよ。今から行くね」

そう言っただけ携帯を閉じ、再び胸ポケットにしまった。

「呼び出し？」

「うん、そうみたい。ちょっと学校行ってくるから留守番お願いね。あ、部屋にあるものは遠慮なく使ってくれてかまわないから」

「分かった」

そう短く返事を返して昶が頷く。

それを確認してから厚樹は席を立って、壁に掛けてあったハンガーから制服を外し、袖を通しながら玄関へと向かう。

人が二人、横に並べるか並べないかくらいの玄関には、靴が二組置かれており、その大きい方の靴に足を通す。

扉を開けると一度振り返り、背を向けて食事を続ける昶に、声をかける。

「それじゃいつてくるね」

昶は返事の代わりに、背を向けたまま手を振った。

厚樹が出て行って1時間ほどたった頃。

食事を食べ終え、食器を流しに運んだ昶は、特にすることもなく

しばらく部屋を眺めていた。

部屋は綺麗に片付いており、家具の大きさなどの違和感に慣れれば、それなりに快適な空間だった。

しばらく眺めていると、家具とは別に一つの違和感に気がついた。「厚樹って学生のはずだよなあ・・・」

そう、この部屋には、学生の部屋ならば必ずあるものが無かった。それは、本。

厚樹の部屋には、一冊も本が見当たらなかった。

本を探して辺りに目をやると、ベッドの横の押入れに目が行った。「ひよつとしてここかな？」

失礼かとは思ったが、沸き立った好奇心を収めることもできず、押入れの戸に手を掛けた。

(ピンポーン)

「っ!!」

不意に鳴り響いたインターフォンの音に、思わず手を引っ込める。タイミングがタイミングだけに、心臓が跳ね上がるような感覚が走り、今も心臓がドクドクと音を立てる。

胸に手を当て、動揺する鼓動を落ち着けながら、玄関へとむかった。

(ピンポーン)

催促するかのように再びインターフォンが鳴る。

「はいはい!どなたですか?」

「黙りなさい!つべこべ言わず扉を開ける!」

「はい!？」

扉に向かって声を飛ばすと、帰ってきたのは女性の声だった。

よく通る凜とした声は、有無を言わせぬ勢いがあった。

なぜいきなり怒鳴られなければ、と思いながらも、しぶしぶ扉の鍵を開ける。

鍵を開けると同時に、ストッパーの外れた扉が待ち構えていたかのように、勢いよく開かれる。

開け放たれた扉の向こうに立っていたのは、勝気そうな鋭い目をした女性だった。

スラッと細身の体は、厚樹と同じ高校の制服に包まれており、声と同じく目鼻立ちの整った凛とした顔に、切れ長の目、青味を帯びた深緑の髪は頭の後ろで団子状に結わえてあった。

少女と呼ぶには大人びた印象が強く、女性と言ったほうがしっくりくる印象があった。

彼女は、昶に鋭い視線を向けると、開口一番罵声を浴びせる。

「遅い！あなた竜門寺 昶ね？厚樹は何処？」

そう言っただけで彼女は、視線を部屋の奥へと向ける

「あ、あんたいつたい誰だ？」

昶が少し声を詰まらせながらも、なんとか質問を声にする。

一瞬に激しく睨まれたが、しかたないと言わんばかりに、彼女はため息をついた。

「一度しか言わないからよく聞きなさい！私は澄沢すみざわ 細奈ほいな、関係でいうなら水薙濤の婚約者よ！」

「婚約者……」

別に異血者の間では珍しいことではない。

名門の異血一族は、その血を守るために、早いうちから結婚相手を決めることが多いのだ。

水薙家ほどの一族ならなんら不思議はない。

が、それにしても……

「やばいぐらいお似合い夫婦だな……」

「ちよつと！まだ結婚したわけじゃないんだから、お似合いだなんて……」

そう言っただけで、顔を赤くして俯く細奈。

（ああ、そういうキャラなんだ、この人……）

そうは思ったが、口に出すと何を言われるか分かったものではないので、黙っておく。

それた話を戻すべく、昶が問いかける。

「それで、厚樹に何か用か？」

その一言に、我に帰ったように顔を上げる細奈は、先ほどの態度のでかい細奈に戻っていた。

「そう！それよ！不覚だわ、こんなガキにペースを持って行かれるなんて！」

「悪かったな、こんなガキで・・・」

「あんたの戯言なんてどうでもいいわ。よく聞きなさい！」

そう言っつて真剣な顔を見ると、細奈は現状について簡単に説明した。

「あんたと厚樹の二人が、昨日の一件で断血者に有害指定されたわ！能力発現の境で、能力が不安定だったのはわかるけど、断血者を殺害したのはまずかったわね。」

「有害指定だつて！？」

有害指定とはいわばブラックリストに乗るということだ。

指定されたものは死ぬまで断血者に追われることになる。

厚樹はいわば、自分が戦場に巻き込んだようなものだ。

自分と関わらなければ、自分を拾わなければ、厚樹は断血者を殺すような事態にはならなかったはずだ。

考えが顔に出ていたのか、細奈が鋭く言い放った。

「自己嫌悪に浸ってる暇はないわよ！だいたい、あなたを拾ったのは厚樹なんだから、あなたに問題はないわ！厚樹はどこ！」

鋭く言われて、我に帰ると慌てて答える。

「電話で呼び出されて、学校に行った」

「相手はわかる？」

「いや、出かけてくるとしか言わなかったから」

それを聞いて細奈は、少し考え素振りをする。

「学校に、つてことはあいつかもしれないわね・・・急ぐわよ！」

「お、俺もか！？」

おどけたようにそう問うと、

「少しは責任感じてるんでしょ！あんたでも、少しは役に立つだろ

うからいらつしゃい！」

「でもこの部屋どうするんだ？俺、鍵もってないぞ？」

「どうせそんな変な部屋のもの持って行くような物好きいないわよ！」

まあそれもそうなんだけど、っと思いなながらも、どうしても気になつて戸惑つてしまう。

そんな昶を見て、業を煮やした細奈が、廊下を歩いていた男子生徒に声をかけた。

否、怒鳴りかかった。

「ちよつとそこのあなた！私たちこれから急ぎで出かけたいの、カギがないからあなた部屋の前に立って、見張つてて頂戴！」

そんな無茶な命令を受けた男子生徒は、細奈の勢いに押されながらも、当然ながら不満を言う。

「そ、そんなこと言われましても、僕にも予定が・・・」

そんな不満を最後まで聞く気のない細奈は、止めを刺そうと小さく囁いた。

「私は水雑 漣の関係者よ？この意味わかるわね？」

そう囁いて、状況が状況なら一発で惚れ込んでしまいそうな、極上の笑みを浮かべる。

「さあ、行くわよ！」

「うわっ！」

細奈が昶の手を引いて、廊下の向こうに消えていくのを、黒縁メガネのぴつたりなパソコンクラブ部長、矢田 一郎は絶望的な心境で見送った。

第四章前編（後書き）

始めました第四章。

今回はいよいよ本格的な異能の戦いを展開していきたいと思っ
ます。前編はその下準備。

では次回第四章後編でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9819c/>

輪廻の血

2010年10月14日13時11分発行